

浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認雜誌第三五二号
昭和三十三年二月二十五日印刷 昭和三十三年三月一日発行

第二十四卷

第三



三月号



浄土寺院必読の書 増版
仏教大学教授坪井俊映著

浄土三部経概説 全

A5上質紙・特製本
三段組・六三五頁
定価一、二〇〇円

初版たちまち売切れ！

仏書のベストセラーはこれだ！

浄土三部経を最も判り易く解説
した本書を ぜひ

毎日新聞評 この経典は浄
土門の拠所となるもの。
浄土宗義を明らかにする
目的で綿密に注訳、解説
が行われている。

常盤大定 監修

B6各四三〇頁余 総ルビ

各巻 四〇〇円

仏典説話全集 全十二巻 特価

三、六〇〇円
(送料共)

御希望に依り第三巻及第七巻増刷して全十二巻を揃えましたか
らお申込下さい。なお分冊売りはしません。

高橋良和著

影絵 法然さま 価九〇円
物語 十一六円

法然上人の御一代記を美しい
影絵によって物語る二色刷の
影絵絵本

幼 児 童 話

日本図書館協会選定図書
高橋良和・小関尚之・
山田巖雄他著
星の花 価一八〇円
十二四円
すぐその儘お話に使えるお
話の台本

発行所 隆文館

浄土 三月号 目次

表紙・扉絵……………結城天童

彼岸への道……………佐藤良智……………(2)

法然上人と念仏……………竹中信常……………(8)

仏教に生きる国の人々……………白幡憲祐……………(20)

アメリカに使用して……………渡辺真海……………(6)

実身がわりの騷……………中野隆雄……………(24)

話妻恋う念仏…………………………(26)

宇治の清流に沿って……………石上善応……………(32)

童話おかあさんの歯……………寺田豊子……………(16)

信 仰 相 談……………佐藤賢順……………(18)

アミダさまのミイラ…………………………(21)

中国敦煌美術展を見る…………………………(12)

職業によろこび生きよう…………………………(14)

書 評「童心即聖心」…………………………(35)

歌 壇…………………………(31)

親知らずの人生……………(28) 扉の御法語……………(16)

禍福の姉妹……………(15) 仏教ものしり帖……………(12)

聖典信仰の中心……………佐藤密雄……………(36)

浄土

三月号

問ていはく、聖人の
申す念仏と、在家のも
のの申す念仏と、勝劣
いかむ。

答ていはく、聖人の
申す念仏と、在家のも
のの申す念仏と、功德
ひとしくして、またく
かはりめあるべからず。
法然上人御法語





彼岸への道

佐藤良智

春だ。春がきた。

彼岸だ。彼岸がきた。

源氏物語の行幸の巻に「十六日、彼岸の初にて、いとよき日なりけり」という。

季節というものに、とりわけ敏感なこのくにの、ひとびとに、季節感とびったり結びついた、彼岸ということばが、なつかしく、こころよくひびいてくる。

源氏の時代から、彼岸は「いとよき日」であった。

「春のひがん」は、白雪の紛々と舞う厳寒から、暗い空からの解放であるし、「秋のひがん」は、酷暑からの解放である。

とりわけ、春の彼岸は、印象的だ。おばあさんが、一方に孫の手を引き、片方に浅黄のふろしきに、たんせいこめて、先に極楽参りをした、おじいさんにささげようとして作った、おはぎや、ひがんだんごをつめた重箱をつつんで、しっかり握り、冬の間は、氷のはり

つめていたが、彼岸のきのう今日は、すっかり水もぬくみ、なにやら、どろの底にうごめいている、裏のたんぼの、あぜ道を、こころのせいか、うっすら緑の色も、色めいて、静かな、菩提寺の屋根の、はるかに遠くみえる森をさして、あるいているすがた。明治の彼岸風景というよりは、昭和の時代、今でもどこかでみられそうな、なつかしい、そしてまた、人生の、味わい深いところで、なにか、ちかっと、ふれるもののある風景。

古来、難波大阪の、なにしをう四天王寺には、彼岸の中日、赤く大ぞらを色どる、落日を、拝する風習があったという。

尽くることのない、永遠の生命をみ（観）ることを教え給う、聖きみ経、観無量寿経に、日想観という、世にも雄渾な修養方法があるが、それを解釈した、唐土の宗教詩人であり、すぐれた宗教人であった、ぜん



どう（善導）大師の著書に、「太陽が東から出て、ま西に没する春と秋の彼岸の中日に、西のかた、はるか十萬億にある極樂に思いをはせ、あこがれの淨きみ國を求めてやまない。情熱をたぎらせ、西には没する落日を拝することが説かれている。四天王寺の西門は極樂の門に向いあっているとされ、古来の風習が行れたのである。往古にあって、四天王寺の丘から難波の湾に大きく落む景観は、さぞかし、ひとびとのところをいたくうったにちがいない。あこがれのところは、神秘のこころに通ずるのだ。み経に説かれる淨きみくに、極樂のかずかずのありさまは、人のこころに湧然とわき出でる、欣慕の真情のかけなのだ。

地上のもろもろの華美わしければ、極樂の花は更に美わしくさきいで、地上の花は散れども、極樂の華は散ることを知らない。地上の光り麗しければ、地上の青葉うるわしければ、地上のもろもろの珠うるわしければ、極樂の七宝は更にうるわしくかがやき出でるであらう。光りまばゆく、青葉は、また、まばゆく、極樂の池にてりはえるであらう。

彼岸へのあこがれ。彼岸への慕情。人類永遠の切なき願望。地上寒むからず、地上暑からざる彼岸の中日

をはさんでの七日、地上の季節の最大のよき日、これが彼岸なのである。彼岸を思い、彼岸をあこがれる聖日なのである。地上、かならずしも美わしさにみちていない。地上からずしも、楽しみにつつまれていない。いな、地上はけがれ、地上は寂しい。ここに彼岸への慕情がある。

われわれは、ここに、しばらく、地上に足をとどめ、これまた、地上に於いても彼岸のあることを知らなければならぬ。この岸、此岸の彼岸。人類の此岸は、常にゆれ、常に浪立っている。人類は、戦に始まり、戦に終るものであらうか。よし戦に始ったにしろ平和に持続し得ないものであらうか。此岸の彼岸、一つには、平和の問題がある。国家或は、国家群間の争い。階級の争いを克服して、大きく平和に共生して行く道はないであらうか。此岸の平和への思慕。これが現在の第一のものである。平和運動は左するもののみものではない。左するものの、為にする平和運動ではなく、平和運動はなければならぬ。

この現代の平和への彼岸の問題は、更に、深く経済の問題に連っている。共産か資本かの機構の問題である。この問題の解決がなければ、平和の問題も彼



岸へとはたどらない。この問題の彼岸への道は、現在とみに、新しい展開をしつつある、高度の科学のすすみにきたいしたい。高い科学への彼岸へ。これが、第二の地上の此岸の彼岸である。戦後の医学の発達、人間に長命を与えた。広義の医学の発達、更に福祉を人類にもたらすであろう。また、もたらさなければならぬ。迷信がいかに、低い医学につらなっていることか。高く、広い医学が、どの位みじめな、なさけない、迷信から解放してくれることであろう。

高い技術革命が、人類にもたらす福祉はこれまた量り知れない。第二の産業革命さえ、さげばれている。き、か、い、がすべてをやってくれるオートメーションが、高く高く発達してくれば、更に、現在知りがたく、将来知られる科学ののびることによって、争いのもとになっている、社会機構の変革も、水の流れるように、自然に解決してゆくかも知れない。そのように人類は、かしくなっていてゆくことを信じたい。

明日をもつこと、それは、彼岸をもつことである。日本の将来にのぞきもち、人類の将来に希望をもつことは、彼岸をもつことである。このくにの、若いひとびとに、夢がないという。それにくらべ、おとなり

の中共の青年達は、ししとして、国造りにしたがっているという。その比較の真実さは、かるがろしく信じがたいが、若人が、かがやかしい彼岸を、理想をもつくにが、民族が、いきながらえてゆくであろう。世界のすみずみ迄、彼岸への光りがさすことをのぞきたい。さて、わたくしは、此岸の彼岸について、筆をすすめた。更にここで、地上の此岸と彼岸をつつんで、第二の彼岸についてかなければならない。

「ひがん」とは、くわしくは、「到彼岸」といって、印度の古いことばで、「パラミター」という。「こちらの岸から、むこうの岸にゆく」というわけである。

人は、生れ、人は、老い、人は、病み、人は、死ぬ。すぎし日に流れ、今ながれ、遠いみらいも、生れ、老い、やみ、死ぬであろう。その流れのなかに、悲しみ、よろこび、なやみ、うれしい、あらそい、うらみ、ねたみ、消えることがない。これを、「生死りんね(輪廻)」とよんでいる。「りんね」とは、生れかわり、死にかわり、はてしのないことである。これが、「此岸」のすがたである。この此岸をこえて、彼岸に到ることが、仏法の目的である。彼岸は、それならば、どのよな岸なのか。「ねはん(涅槃)常楽」の世界とよば



れている。生と、死と、をこえた、常にたのしい世界である。そのような世界が、しんじつ、あるのであるうか。それを求めて、し、や、か、むに如来は得たもうた。つづく、もろもろの聖者達も、これを求め給うた。そして、各々その道をきりひらかれて、ひとびとに示し給うた。唐土に、わが国に、身をもって、その道を歩まれ、示され、かぎりのない人びとを救われた、宗祖がた、それにつづく聖なる人たちを、わたしたちは知っている。

これらのかたがたの中にあつて、たあかく、そして光りある聖者の一人に、法然上人がいられる。上人は、唐土の、ぜんどう（善導）大師によってみちびかれ、浄土の教を説かれたことは知られていることである。大師が、西のかた日落するところに、浄土を、さだめられことは前にのべた。

浄土のみ教えが、「けがれなくをはなれ」（厭離穢土）「きよきみにをもとめる」（欣求浄土）ことであることは、今更、言うまでもない。し、や、か、むに如来の説かれたお言葉を、更に、言葉をかえて申されたものである。

このきよきみくには、あみだぶつ、のましますくに

である。あみだ仏は、永遠の生命（無量寿）と、かぎりなきみ光り（無量光）とをそなえたもう。このあみだ、仏のみ国に、生れることが往生である。往生こそ、「到彼岸」である。

「彼岸参り」とは、生と死とをこえて、常に楽しいという、彼岸に、流れ入ることである。かぎりのない生命と、かぎりのないみ光りにつつまれることであり、いだかれることである。彼岸はここにある。春と秋とを問はず、「なむあみだぶつ」とみ名を杯え、み名に救われる、行、住、座、臥、のこの一息、一息のなかに彼岸はある。生もなく、死もなく、ただ、これをこえた、第三の生が、念々に、せつな（刹那）、せつな、ここにある。み名をとええ、この一息に彼岸への道はつづく。東も、西も、南も、北も、これをこえた、第三の西方への道はつづく。いかなる方向も、みな、これをつつんだ西方なる彼岸の世界に続くのである。この彼岸あつてこそ、前にのべた、この地上の、此岸と彼岸とが、真実なもの、永遠なものになるのである。永遠の生命と光明のうちにない、人類の明日も、人類の平和も、人類の福祉もあり得ないのである。命と光りを得た国は、民族は、人類は栄えるであろう。

アメリカに使用して

浄土宗務長



渡辺真海

かねて、ロスアンゼルス野崎靈海師から、北米浄土宗別院が完成したのでぜひ見舞って欲れないかという話があり、そのうちに機会をみていちど訪問しようと思っていた。ところが、昨年十月末、急に信徒理事長夫妻から招請状をうけたので、いそぎ手続をすませ、十一月十九日にビザが下り、吉水教学部長同道して、廿二日午後七時、ノースウエスト機に乗り、すっかり秋も深まった羽田空港をあとに機上の人となった。

翌日（第二廿二日）の午前十時四十分、ラスカのアンカレヂに着陸、飛行機は給油、わたしたち乗客は委任官の調べをうけ、二時間後また機上の人となり、午後七時四十分、米領シアートルに到着した。荷物等の調べをうけ、そこで三時間半程憩い、夜十一時発、ナユイデットエアラインに乗り換えて廿三日午前五時ロスアンゼルスに到着した。飛行場には、野崎師夫妻、信徒総代の方々の出迎えをうけ、まづ別院に参拝、野崎師の私宅に落ちつき、異国での第一日を過した。東京を発つ頃は、肌寒さを感じずる気候であったが、ロスアンゼルスは、丁度日本の四月末頃のおだ

やかな陽気であった。この街に第一步を印して感じたことは、道路が整然として居り、微塵も埃りがないということだ。埃りのない都という感じをうけると共に、誇りのある都という印象をつよくした。それは、ここは新興都市で年々十万人づつ人口が増加しており、今後十年後は世界一の都市になろうと意気込んでおる生氣潑刺とした街の模様だからである。

わたしは、ここに十七日間滞在して野崎師の好意により各地に案内をうけ見学してまわった。市長公舎の近かくに日本人町があり、そこに西本願寺別院、高野山別院、禪宗寺の堂々たる殿堂が建てられている。その他東本願寺別院、日蓮宗別院等も夫々立派な道場をもっており、かれらは共々開拓精神に生きつづけながら伝道布教をしている様はまことに尊いものを感じた。わたしは、それらの事情を視察ののち、特に、日本人の名誉墓地に参拝する機会を得た。そこには、第二次大戦のとき、二世三世によって編成された四四三部隊が葬られているのである。この隊は、ヨーロッパとくにイタリー、ドイツ等に転戦をし

て有名を轟かせた部隊であつてその大部分が戦死したものであつて、それらの霊は、飛行将校の銅像を中心にその両側に二世三世の名簿を刻みこみ、毎年盛んに記念祭が行われている。この二世二世で編成された軍隊が母国のために忠誠を捧げたという事実が、終戦後のいままでアメリカ人の日本人に対する信頼を非常に深めているという感じをうけた。

メキシコの国境に近いサーマル、ロッキーを越えて、フレズノ市、サクラメント、サンフランシスコ、サンノゼ等の西本願寺別院を訪問した。丁度三日間の行程で、自動車のドライブは日本では一寸味えぬ快適なものだった。

各地を訪れて感じたことだが、表向の名前は〇〇市仏教会と名うっているが、その経営者は大体西本願寺系統が多く、サンフランシスコを伝道本部として米国各地に七十カ所の教会をもつて布教伝道に邁進している。この状態をみても、今後仏教をアメリカ等に伝道するには宗派意識を出さずに、オール仏教とすることを標榜してすすんでいくのが賢明と思う。また、今、ロスアンゼルスで問題とな

っているのは、市の中央区にある日本人町が区画整理されることに決っているため、この町が何処に移転するかということが悩みの種となつていようだった。仏教々界上にも支障を来すものと思うが、その点野崎師がジエファソン通りの一面に仏教会堂を手に入れたということは非常に意義あるものと思われた。この会堂でわたくしたちは開堂式とともに法然上人七百五十年御忌のおまちうけ法要（御逮夜法要）を厳修したのである。

わたしたち二人が、十二月九日午後十一時五十九分、ロスアンゼルスよりパンアメリカン機にて、ホノルルの飛行場に下り立ったのは十日午前八時であつた。

ハワイ群島の開教は、明治廿七年にハワイ島のラッパホイホイにその根を下してから、現在では、ハワイ、オアフ、カワイ、マウイの四島の中に、浄土宗の寺院が十六カ寺出来ている。オアフ島ホノルルマキキ街に伝道本部を置き粒々辛苦しながら教線を拡張している。六十四年の開教記念の土地であるので、わたしは吉水数学部長同道して、各地を巡錫し監督、主任および信徒代表者たちと会って戦争中の労苦をねぎらい慰さめの言葉を述べ

てきた。ハワイはやはり常夏の国といわれる通り、丁度わたしたちが訪れたとき、冬だといふのに、ホノルル市のワイキキ海岸では水泳を楽しむ人々で賑わっており、すべての樹木や花々がいきいきとしている感じだった。

現在におけるハワイ群島というものは、各国の人種が集まっている。すなわち、アメリカ人、日本人、カナカ族、メキシコ人、シナ人、朝鮮人、黒人等の種々の人種である。しかし、日本人が約三十万に近い人口をもつて、二世三世の中、多くの人々が相当の地位を得、大いに功を名している。

わたしの感じでは、非常によく働くということが云いえようかと思う。かれらは、どこかの家庭でも昼間は共稼ぎをし、夜は全く家庭団楽をする。よく働き、よく憩う、この気風は誠に貴いことであつて戦後の日本の若い人達が多いに留意を払うべきではなからうか。

十二月十七日午後九時半、日航機でホノルル空港を出発し、途中ウエエキ島に立寄り（この間十八日一日除かる）十九日午前十一時、約一カ月振り羽田空港に舞戻った。



法然上人と念佛

(続)

竹 中 信 常

一、仏さまの目には、みんなが平等

どうして、御上人様のお念佛が、ほかの人々の念佛よりすぐれてないことがありましようか。この答えをきいて、法然上人は、いまだに、自分の本意が弟子達にすらわかっていないのをなげかれて、丁度その折、愚かではあります、が、一生懸命に、念佛の道をはげんでいる阿波の介すけという男が、ほうきで庭を掃いている方をお示しになりながら、「本願の念佛の趣きを未だ心得られざるなり。かの阿波の介の念佛も、源空（法然上人のこと）の念佛も、全く以って同じ念佛なり。助け給え阿弥陀仏と思うより外に、別の念いを置かず」

とおさとしになりました。

法然上人は、念佛すること、ありのままなる世界に素直におに随順して行く生活において、人間の平等を発見された

のであります。いうならば、西洋において、ルネサンスに至って始めてとなえられたヒューマニズム、即ち、人間の本性の平等、自然のままの現実生活を素直おにうけ入れて行こうとする思想を、法然上人は、それよりもはるか以前に、念佛為本、念佛をもとになすという信仰の上に、美事に、樹立されたのであります。

ですから、人間は、念佛の生活を押しすすめて行きさえすれば、阿弥陀仏の救いの手はすべて平等に下って、阿波の介も、法然上人も、すべてひとしく仏のお国、極楽浄土に生れることが出来るのである。従って、念佛の生活とは、それぞれの生活の中で、あるいはそれぞれの生活の上で、念佛をとええらというのではなしに、凡ゆる人が、同じく、南無阿弥陀仏となえる、その念佛の中にこそ、本当の人間生活が打ち建てられて行くことをいうのであります。こういったところにこそ、法然上人のいわれる、念佛

のヒューマニズムがあるのであります。

その当時、法然上人は、色々の人について、当時の仏数の学問を研究して、凡ゆる宗派の教義を理解しました。が、どうしても納得の行かないことがある。それはどういうことかと申しますと、どの宗派の教えをみても、一番肝心なものがぬけている。それは、愚かな者、罪深いもの、自分の悪業に苦しんでいる者、いつてみえますならば、一番仏のすくいを必要とするもの達、しかも、人間の社会では、こういった人達が一番多いのに、これをぬきにして、むづかしい理窟や、やりにくい修業をすすめる。これでは、いつまでたっても、仏教を世間の人のものにすることは出来ず、一般の人もすくわれないうじゃないだろうか、ということなのです。

頭脳明晰な法然上人は、もう、ひとにきいても無駄だとさとりまして、自分ひとりで、この納得の出来ない問題にぶつかっていったのです。数千巻もあるという大蔵経も、三回、四回とくりかえしてよんでみました。経蔵の中にこもって、夜も眠らずにはげみました。丁度、その頃、京都では木曾義仲が乱を起して、今にも攻め込もうとしていて、物情騒然たるものがありました。こうして、法然上人は、京の町を中心に行われた源平の合戦もよそに、ひたす

らに、おのれの問題の解決にむかって、まい進されて行っただけでありました。ただ、木曾義仲が京都に乱入した日だけは、あまりまわりの者が心配するのでか経蔵ら出て、裏山に入って難をさけたと伝えられております。

二、御苦心の結論は一枚起請文

このように、骨をけずるような苦心、研さんの結果、法然上人は、一つの結論に到達されたのです。それは、前に書きましたように、どんな人でも、仏の目からみれば、みんな平等だという、宗教的ヒューマニズムを唱えられたのですが、それならば、どんな点が平等なのかというと、むづかしくいえば、人間性の本質は何か、ということなのです。

「われは烏帽子を着ざる男なり、十悪の法然房、愚痴の法然房が、念仏をして往生せんというなり」

「法然上人のたまはく、われはこれ無智の身なり、われはこれ破戒の身なり。……」

こういうわたのです。勢至菩薩や、文殊菩薩にもくらべられるほど、明せきな頭脳を持った法然上人でも、仏の前に出ては、無知愚鈍なやからにほかならないのです。いや、人間の小ざかしい智慧とか、はからいなんてもので

は、到底はかり切れないものが、仏というもののなのであります。そこに気づかれたのです。それですから、もう、何もいえない、何をしてでも無駄なこと。ただ、一心に、心の底から、仏を念じ、仏の名をとねえろほかに、私共、人間としてすべきわざはないのであります。

念仏をとねえろということは、自分の愚鈍罪業についての自覚を裏づけとして、その上に、仏の廣大無辺の慈悲を仰ぐことに外ならないのです。むづかしい言葉で申しますならば、自己を否定することによって、逆に、一そう大きい真実の自己を見出してゆくことと申せます。

こうした自覚は、口では簡単に説明することも出来ますが、実際にすることは、非常にむづかしいことです。法然上人のように、人なみすぐれた頭脳を持ち、数年間に及ぶ、血のにじむような苦心の末に、はじめて得られるものなのです。しかも、そのような偉大な法然上人が、御自分のことを、愚痴の法然房とおっしゃった。ここに法然上人の自己否定と、念仏によって生きて行かれた自己肯定とが、一枚の紙の裏表のようにみられるのであります。私共は、法然上人の得られた、人間性の結論から出発すればいいのです。念仏を申すことから出発するわけです。それ以前のこととは、私共には、出来もしませんし、またする必要もないわけです。

法然上人は、建暦二年一月二十五日、八十才でなくなら

ました。昭和三十六年がその七百五十回忌に当るわけですが、その臨終の二日前、弟子の勢観房源智という人の求めに応じて、念仏についての心得を、半紙一枚に書いて渡されました。

「もろこし我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず、また学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず、ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思いとりて申すほかには別の仔細候はず……念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともからと同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」

これが「一枚起請文」といわれ、浄土宗で一番大切な心得とされているものです。

法然上人は、こうして、仏教というものの、信仰というものを、智者や学者の手から、何も知らぬ、何もわからぬ、愚鈍の人々、即ち、一般民衆の手へとお渡しになったのであります。

三、流罪すら仏縁と喜ばる

そのために、仏教を売物にし、出家を職業と心得えていた一部の僧侶からは、はげしい反対がとねえられました。高遠な仏教をだ落させるものだとか、念仏だけでよいとい

うのは、折角、釈尊がお説きになった八万四千の法門を、全部無駄にしてしまうものだとか、愚民をまどわす邪法であるとか、色々の非難があげせかけられました。そして、とうとう、讃岐の国（現在の香川県）へ流罪に処せられました。しかし、その時にも、法然上人はこう申しておられます。

「流刑さらにうらみとすべからず、そのゆえは、^{よわい}齡すでに八旬（八十才）にせまりぬ。たとひ師弟同じ都に住すとも、娑婆の別離近きにあるべし。たとひ山海をへだつとも、浄土の再会、何ぞ疑はん。……しかのみならず、念仏の興行、洛陽（京都）にして年ひさし。辺びにおもむきて田夫野人をすすめんこと、年来の本意なり、……この法の弘通、人はとどめんとするも、法さらにとどまるべからず……」

流罪をうらんではいらない。私も、もう八十に近い。一緒に都に住んでも、もうすぐこの世でのお分れが来るのだ。たとえ離れ離れになっても、仏の国浄土で再び会えるぢやないか。……それだけではない。念仏の教えは、京都ではもう長い間やって来た。しかし、遠い辺びないなに行つて、お百姓や漁師たちにこそ、この教えをすすめることこそ、私の年来の希望だったのだ。

流罪されることによって、念仏のありがたさを、未だ知らぬ、地方の人々へも、教えることの出来ることを、むしろ喜んで出かけられたのであります。

こうして、法然上人は、あくまでも、仏教を大衆のものとし、一般の人々のものであると確信されていたのであります。いや、法然上人自身、私共大衆の間にはいり、大衆の一人として生きられた方なのです。ですから、生涯、お寺というものを建てることをされず、常に、町中の普通の家に、人々と軒を並べて住まわれました。病い重くなった時、弟子の法蓮房が、

「昔のえらい方々には、みんな遺蹟があります。しかるに、御師匠様はまだ一軒のお寺もお建てになっておりませんが、若しお亡りになったら、私共はどこを遺蹟と定めて、お参りしたらよろしいのですか」

とたづねました。

これに対して、法然上人は、

「あとを一廟にとどむれば遺法あまねからず。余が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆえいかなとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば、念仏の声するところ、貴賤を論ぜず、海人漁人のとまやまでも、みなこれ余が遺跡なるべし」

と申されました。

念仏の声のするところ、どんなになかにも、どんな貧しい家にも、どんな罪深い人の心にも、法然上人は、今も生きておいでになるのであります。

（おわり）

中国敦煌美術展を見る

一月十九日まで日本橋高島屋で、中国敦煌美術展が開かれて、仏教芸術や東洋文化に関心を持つ人達の人気を集めた。石窟の模型（六疊敷位の）や、壁画の模写、石窟内の写真が多数展覧された。

敦煌は中国甘肅省の西辺で、北京からの距離は、直線にしておよそ北海道のはてから下関ほどの所にあるのだそうである。中国と西域や印度への交通の要路にあつて、乾燥地帯である。二十世紀の初めにイギリスのスタンやフランスのペリオやわが国の大谷探検隊が、ここの千仏洞を踏査してその中に隠されていた多数の絵画や経典を発見して世界に紹介してから、有名になった。千仏洞という

が、実際は五百幾つほどの石窟が砂岩の丘陵にうがたれていて、その一つ一つに彩色された塑像の仏像と、その周辺から天井まで、びっしりとテンペラで壁画が描かれている。最

も古い石窟は四世紀の半ば頃、東晋の時代で、それ以来、北魏（第五、六世紀）、隋（第六、七世紀）、唐（第七世紀から九世紀）を経て、下は元（第十四世紀）に至るまで、一千年に及ぶ長い間に、その時々権力者の外護で作られていったのであつて、辺境に位置を占めていたために、幸いに現在まで保存されてきたという点で、東洋文化交渉史の上から、極めて重要な文化財となっている。

この美術展の内容は多くの新聞雑誌に紹介されていたが、殆んど紹介されなかった点の一つ報告しておこう。石窟内に描かれた壁画には、興味深いものが沢山あった。北魏から隋までのものは、古拙素朴で描線が力強い。顔料が剥落して下描きの描線の出ているところは、ピカソやマチスそっくりの強い線で、顔や乳や腰の線などが描かれていて、モダンアートをみる感じだ。釈尊伝や釈尊の前生の

仏教ものしり帖

般若 ハンニヤ 梵語プラジュニヤ、パーリー語パンニヤ、智慧、本当の智慧の意。我国では、般若の面などのように鬼女を指すようになったが、これはパンニヤという語に「学問のある女」という意味があるところから、賢い女の顔が誇張されたのか、または、お経を読む声を般若声といい、悪魔を退散させる力があるところから、こわい顔をしたものと考えられたのかも知れない。

お経の中に「般若心経」というのがある。

これはわずかに二百六十二字しかない短いお経だが、般若すなわち仏の真実の智慧の肝要（心）をといった大切なものである。仏教の全教義をすべてここに集めて、その精髓を圧縮したものである。機会があつたらこれをとりあげて解説してみたいとも思っている。またこの経は何宗にも用いられるので、憶えておくと便利である。

三途の川 みつせ川、わたり川、葬頭

物語（本生譚）を絵巻風に横に描き続けたものが一番多いが、ここで紹介したいのは、浄土教関係の美術のことである。

それは唐代になって西方浄土変が沢山描かれたということである。五百有余の石窟のうち二一カ所は唐代の穿作で、全体の四五パーセントに当るが、ここに描かれている西方浄土変は二二八の多数で、他の画題に比べて断然多い。東方薬師変、弥勒変、維摩変、法華経変、華嚴経変が、多いのは六九から少いの二五という数字であるのに比べると、格段の違いである。変というのは変相図で、その浄土の有様を描いたもの、曼荼羅である。

西方浄土変は観無量寿経の説く所に従って描かれた極楽の有様（依報）とその国土の仏（正法）の姿とである。それは現在も行われている観経曼陀羅（当麻曼陀羅という）と殆んど同じ図柄である。真中に阿弥陀仏と観音、勢至の二菩薩が在し、下に宝池があつて蓮花が開き、舟が浮び、多くの往生人が遊樂し、上には宝台樓閣が聳え、天女が舞い花片が散り天樂が奏でられている。現在の観経曼陀羅と違ふところは、周辺左右下の外陣の禁父縁、禁母縁や十六観が描かれていないということである。いずれにしても、唐代になってこの

ように多数の西方浄土変が描かれたということとは、観経を中心とした阿弥陀仏信仰が隆昌になったことを物語るもので、善導大師が浄土変相図を描くこと三百鋪という伝説も、あながち虚構とのみは考えられない。

それはそれとして、今度の展覧には西方浄土変が四点出ている（そのうち二点は部分図）。第一七二窟の浄土の変は、現在の当麻曼陀羅と殆んど同じ構図であるのは興味が深い。しかし観音と勢至の位置は、この画では通例とは逆になっていて、観音は画面に向つて左で、水瓶に入つた蓮花の開いたのを左手に捧げている。同じ窟の他の部分図（観音）を見ると、しかし、観音は向かつて右で、やはり蓮花を捧げている。そうかと思うと、第三二〇窟のように、観音、勢至に当る両脇士が、ともに合掌して同じ姿をしているのもある。宝冠に化仏もないから、両脇士の区別はつかない。こうしてみると、いろいろの作例があつたようである。

唐代の塑像は実に写實的で（写真で見るとだが）、全く実在の人のようである。北川桃雄氏が、「この菩薩さん、実に色っぽいだろ」といつていたが、全く豊艶そのものの菩薩像であつた。

（佐藤賢順）

川ともいう。人が死んで初七日に渡るべき川で、流れにははげしい所とゆるいところと三通りがあり、生前したことはいかんで三つの途のいづれかがきまる。川のほとりに脱衣婆がいて亡者の着衣をはいで、懸衣翁がこれを樹の技にかけると、罪の輕重によつて技がたれさがるといふ。六文錢はこの河を渡る時に払わねばならぬのだが、これは死んだ後までも、財宝の必要なことをおしえて、節約の心を強めるためである。川を渡つてしまふと死者の国で生きかえれぬ。

お賽錢

または「おひねり」ともいふ。銅貨を紙につつんでひねるところから出た名である。

賽というのには、神から福を授つた時、そのお礼の心を以つて営む祭儀をいふのであるが、それが段々になつて、神仏に参詣した時に、その恩徳利益を心に浮べて宝前に錢を献ずることになつた。また神社の大祭の時のように、錢を散投するところから散錢ともいふ。寺院では大體本堂前とか本尊様の前に、三宝を置いてこれに入れる場合が多い。

職業によろこび生きよう

人生に対する希望と確信を胸に秘めながら、いま学窓を巣立ち、新しい職業に就いて、勇々くきびしい社会の中に生きぬこうとしている若き人々に、このささやかな一文をはなむけとして呈そう。

まず、職業について、自覚と安心を持つということが何より大切である。腹がすかない不健康なものは食前に向うたびに小言をいうだろう。どんな御馳走が並べてあっても食慾がないのだから自然に不満がおこるのだ。これほど不幸なことはない。食事と同じように職業は毎日のことだから、これについての自覚をもっていないことほど

不幸なことではない。職業に対する不平不満をもっていると、健康なものでも、いつの間にか病気になる。近頃の青年に非常に病人が多いのは、無論いろいろの衛生上の原因はあるけれども、もっと根本的に、精神上の不満があるからだ。職業に従事しなければ生活が成り立たない。餓死をもっておびやかしつつ、社会は青年を好まざる職業に追い立てる。この餓死と不平不満の職業とのジレンマは人間を病気にするといえる。ことにノイローゼというようなものが多いのはそのためだ。

ノイローゼということにもいろいろ原因はある。しかし純粹に疲労から来るということはたくさんあるものではない。なによりも「嫌だ」と思いながらすることが一番いけない。自分から好んで、進んで出来るような仕事ならば、よほどやり過ぎてても大丈夫だ。勿論、すきな仕事の場合でも、「これは疲れたと自覚したなら休養を要することはある。とにかく、自分の職業をいやいやながらやらずに「職業をよろこび生きよ」とわたしは言いたい。自分の嫌いな職業に対してはよろ

こべといわれてもそれは出来ない、「觀念の置きかえ」といっても、そう簡単にいかないと憤慨する人もあろうかと思う。それはもっともなことであるが、しかし、好む職業、適した仕事ということは、それは天から与えられた「適した仕事ではなく、」凡才のわたしたちが、真面目に努力して、試みて、馴れて、そこにはじめて、「適した仕事」を作るものでなかろうか。自分で適した仕事を創造するよりほかに道はないのだ。

現代の職業の問題は、それは社会問題ともいえよう。それは、資本家の横暴ともいうことになる。社会問題はもとより大切なことであるが、しかし、現代の人は、ともすると自分自身の欠陥さえも社会の欠陥、他人の欠陥にする傾向があるから、その点は充分反省しなければならぬ。

もともと職業の本質的意義は「職業とは、各人が、自己の才能に適した仕事に従事して、社会文化の建設に参与する」ということである。そのためには社会的条件がよくならなければ目的は達せられない。また、自分一人のことを考えているようなことでは、其の

幸福は来ない。人格相犯さぬことは勿論のこととお互の幸福を尊重し、自分の生存には社会から多大の便宜と恩恵をうけているのだから、自分もまた自分に出来ることをしてこれに酬いなければならない。すなわち、自分の才能に適した仕事に従事して、社会文化の建設に参加しなければならない。

ここで考えなければならないことは、自分の才能ということである。よし一世に秀でた天才であるなら、いかにも社会文化に貢献することはできようが、もし才なきものはどうしたらよいのだろうかということである。わたしたちは、ここで「社会の文化」ということをもう一度ひるがえって考えてみたいと思う。社会の著しい進歩のためには偉大な天才は必要とするかもしれない。しかし、社会のもっとも幸福なことは、ただ著しい進歩ということばかりではない。調和され、完全に維持されるという社会の創造、それにはすべての社会人が協力する必要がある。一人のこらず協力せねばならないのである。その意味でかならずしも天才を要しない。いかなる凡才でも、自分の出来ることをすることが肝要だ。

この社会に住するわたしたち人間はみな全部が全部才能をもっているのではない。大いに世につくすことができないが、しかしそれは決して恥しいことではない。それよりも、何か自分にできることは必ず実行する。誠実を

禍福の姉妹

夜も更けて床に入ろうとした時、誰か案内を乞う声がした。今頃なんだろうと思ひながら戸を開けてみると、一人の美しい女が着飾って立っていた。

「何んのご用ですか」と質ねると、

「別に用事があつてきたわけではありませんが、私は富を与える福の神です」

と答えた。主人は喜んで、早速にその女を請じ入れ、茶、お菓子と手厚くもてなした。すると問もなく、また誰か案内を乞う声がしたので、主人は戸を開けてみた。すると今度は卑しいみなりをした醜い女が立っていた。

「何んのご用ですか」と質ねると、

「別に用事があつてきたわけではありません

もつてその与えられた任務を遂行することが大切なことである。その任務の遂行によつてのみ社会は調和され維持されてゆくのである。」

(S. M.)

が、私は貧乏の神です」

と答えた。主人は驚いて、これは困るお帰りなさいと追い出そうとした。すると女は

「私は用事こそないが、先にお宅に入った福の神は、実は私の姉さんなのです。姉妹はいつも離れたことがありませんから、私が帰れば姉も一諸に帰るでしょう。私を追い出すなんて愚かなことです」

と答えた。醜い女が去ると美しい女も玄関に来ていて、一諸に姿を消してしまった。

生があれば死があり、福があれば禍がある。善いことがあれば悪いことのあるのを知らねばならぬ。愚かものは、この主人のようにいたづらに禍をいとうて福のみを求め、道を求めるものは、二つをとともに超えて、執着してはならぬ。

童話

おかあさんの歯

寺田 豊子

お日さんが笑いだした、と思った。だって急にあたたかになったもの。おかあさんは、坊やの頭をなでながら

「今日から寒い日がなくなったのだよ」

といった。

「ほんと、おかあさん」

ともっとききたかったけれど、おかあさんがご用で台所に行ってしまったので、坊やは独りでふしぎな顔をして立っていた。

「なんだ、今じぶんおかあさんは、お顔を洗っていたの」

と、おかあさんのそばにいったが、おかあさんは、さっさと洋服なんかに着かえはじめた。

「坊やはおとなしく遊んでいるのですよ」

といったまま、おかあさんは出掛けてしまった。それでも坊やはお利口で、だまって待っていた。

帰って来たおかあさんは、少し顔をしかめて変なお。

「おかあさん、何して来たの。」

坊やがたずねると、おかあさんはだまって口を開いた。

「あ、はがいたい。」

おかあさんはだまってこっくり。

「ほら坊や、お母さん歯がないでしょ。」

「はいしやさんがとっちゃったの。」

「そう、だからほら、こんなに血が出たでしょう。」

「はいしやさんわるいね。」

「だっておかあさんの歯がわるいんだからしかたがないの。だからこれからいい歯を入れてもらうの。」

坊やは気の毒そうな顔をしてみている。

それからまた何日かたって、おかあさんはやっぱり坊やにだまって出かけてしまった。

扉の御法語

この御法語は、「念仏往生要義問答」にでている一句です。念仏往生の要義の問答集という意味で、沢山の問答が集められている一文ですが、内容は教義とかいう難しいものはいつもありません。日常寝たり起きたり食べたりするのは何んでもない普通生活と念仏との関係の一つ一つお答えになったものです。例えば、酒を飲んだり魚を喰べたりしてから申す念仏は功德が劣るかどうかといったものです。当時の人が日々の自分の生活の内容を直接上人の指導を得ようとして、熱心に率直に一つ一つ駄目を押すように質問している姿が目に見えます。

要するに、念仏を申す人なら、善人と悪人の区別もなく、男と女の区別もなく十人は十人ながら、百人は百人ながら、みな往生するのだと繰り返し教えておられます。上人の温かいうちにも熱烈な信仰心を直接いただく多くの人たちの嬉しそうな顔が思いやられます。同じこの一文の中に次の有名なたとえ話があります。



帰って来るとおかあさんはこの前よりもっと変な顔をしている。坊やがおかあさんにとびついた。おかあさんはハンカチで口をおさえていた。それをだまっではなして坊やの前で口を開いた。坊やはあつと思った、だつておかあさんの口には歯がみえないんですから。おかあさん少しなさけなかった。もし、本当にこのままずっと歯がなかったらきつと悲しくなつて、いくらおかあさんだつて泣いてしまったかも知れない。なぜって全く歯のない顔を鏡にうつしてみたらおばあさんにそ

っくりですもの。

「坊や、おかあさん、おばあさんみたいね。」

「うん。」

「坊や、おかあさん、おばあさんでもいい。」

「だめ。」

坊やはきつぱり云つた。やっぱりおかあさんはおかあさんでなければだめという。きつとおばあちゃんとまちがえるかも知れない。

「坊や、それなら少しがまんしててね。いまはおかあさんおばあちゃんだけど、もう少したつと歯医者さんでおかあさんの新しい歯が出来上つていい歯を入れてもらうからね。だから坊やはむしばにならないように気をつけてね。」

おかあさんは早くいい歯の入るのが待ち遠しい。坊やもきつとそうに違いない。けれどそれより誰だつて生れた時のいい歯をそのままずうつといい歯でおじいさんやおばあさんになるまでもつていたら、もっといいに違いない。坊やのおかあさんは坊やの歯がずっといい歯であるように気をつけなければいけないとおもつた。

（加藤金一画）

麒麟の尾にとまつた蠅は、麒麟と一諸に野を馳けることができる。大きな石も舟にのせれば、楽に運ぶことができる。これは蠅の力でもなく、石の力でもない、麒麟や舟のおかげである。往生できるのは個人個人の善人かどうかといったものの力でない。みなアミダほとけの御ちからである。これがすなわち他力である。

また次の一句もこの一文の中にあります、善悪をへたてず、持戒破戒をきらはず、在家出家をもえらばず。有智無智をも論せず。平等の大悲ををこしてほとけになり給ひたれば、ただふかく本願を念じて念仏申さば、一念須臾のひいだにアミダほとけの来迎にあづかるべき也。

むまれてよりこのかた女人を目にみず、酒肉五辛ながく断じて、五戒十戒等かたくもちて、やむ事なき聖人も、念仏に不足のおもひをなして、余行をまじえ申さんにきては仏の来迎にあづからん事、千人が中に一人、万人が中に五三人などや候はんずらん。それも善導和尚は、千中無一とをほせられて候へば、いがあるべく候らんとをばえ候。

信仰相談

(質問歓迎)

担当 佐藤賢順

問 お念仏は何となく淋しいような気がし

ますので、わたくしは朝、勤めに出かける時には、仏壇の前でお題目を唱えて、それから出かけていきます。一日元気で無事で働けるように拝む気持です。けれども一日の仕事を終って、夜、寝る前には、やはりお念仏でなければ、落ちつけない気持で、一日を感謝して南無阿弥陀仏を唱えて、やすみます。こういういき方は如何でしょうか。(台東区 田口 勇)

答 お手紙の末に四十五才と書いてありますから、御年輩からいっても、もう円熟したお年で、羨しい立派な宗教生活をしていらっしゃるお方だと思います。宗教が生活と実によく溶け込んでいて、信仰の力で生活が導かれていくという御心境のようです。その点で羨しいと申すのです。

が、しかし残念なことに、もう一步前進し

て、徹底なさらなければなりません。お念仏が陰気でお題目が景気が好いなどというのは、全く皮相な考え方で、声の大きい小さいでその内容が定められるわけではなく、唱える人の狂信的な態度と静かな態度とで、深さが決められるわけではありません。

南無阿弥陀仏は、「帰命いたします、阿弥陀仏に」という意味で、阿弥陀仏とは限りない命の仏、量りきれぬ光の仏ということですから、無限の生命と無量の光明に全身全心を任せきることです。そして自分もまた無限の生命を勝ち得て無量の繁栄を続けることです。ですからこの位、景気のよいことではないではありませんか。

わたくしどもを包み護り育くみ生かしているものは、無限の生命と光明です。もちろん生命とか光明とかいいいますのは、一応の言葉で、とに角、生きた大きな力です。それに護

られて、明るく楽しく生きていくのが南無阿弥陀仏です。お念仏は力強く大きく唱えて下さい。二十年ほど前に亡くなられた渡辺海旭大徳の十念は獅子吼に似た力強い十念でした。

信仰は「あれもこれも」ではいけません。「あれかこれか」でなければなりません。病気の時には名医にすべてを任せて迷わないことが必要で、あっちの医者、こっちの病院と持ち廻っているうち、取りかえしのつかないことになってしまふことはよくあります。信仰もその通りで、純粹でないとほんとの確信は得られません。安心決定(あんしんけつじょう)しません。

問 亡くなった人の魂は四十九日までは軒先きを離れないとか家の棟を離れないとかいいますがほんとうでしょうか。また初七日、五七日、四十九日というように七週間の供養をするのはどういうわけでしょうか。(静岡 県田方郡 村岡はな子)

答 亡くなったその日から数えて四十九日までの間のことを中陰とか中有とかいいまして、お手紙の通り、俗に魂が軒先きを離れないといっています。中陰は途中の暗い処にいると

いう意味。人間はこの世の業(行つた行為)によつて次の生涯がきまるので、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道のうちのどこかへ生れ変わるのですが、それまでの間が中陰というのです。

これは印度の古くからの民俗信で、それが経論にも書き残されているのが、中国を経てわが国に伝わり、わが国の仏教以前の精霊信仰と結びついて、しきたりとなつたのだと見るのが、一般の発生的な説明のようです。

その他、阿弥陀経などにある「もしは一日……もしは七日」という七を、満数とみて、七の七倍という数で、中陰を解釈する人もあります。

しかし今時、六道輪廻の思想などは通用しにくいことで、比喩的な物語ですから、この中陰の仏事の大切な意味がもっと深い所にあることを見なければなりません。釈尊は長い苦行の後に、悟りを開かれてから、その悟りの内容を順観し逆観して、幾七日かを静かに過されたということが經典に伝えられております。つまり釈尊は悟りを開かれてから幾七日かの間、その悟りというものに磨ぎをかけ

て、仏陀を完成されたのであります。七七日の間の仏事もそれに做つたもので、亡くなつた人が極樂に生れて速かに仏陀となるように、悟りに磨ぎをかけて完成するように、遺つた者が回転するのです。

悟りの世界というものは、直実と愛との一体となつた世界、古い言葉でいう智慧即慈悲の円満した世界です。この世界は皆して作り上げねばなりません。亡くなつた人だけに任せておくのでなく、遺つた者も力を協せてこの世界を作つて和やかに生きてゆく——これが中陰の仏事です。

▼ 近刊予告 ▲

——浄土トラクト——

佐藤賢順著

○ 信仰へのみちびき

定価 二十円
送料 八円

竹中信常著

○ 仏教入門

定価 二十円
送料 八円

三月中旬発売予定

アデナウワーの誕生日

ニュース映画を見たら、西独のアデナウワー首相の八十四回誕生日の祝賀風景が出てきた。八十四歳とはいいいながら、壮者を凌ぐカクシャク振りに驚かされた。

首相は何千から国民の祝福を受けて、自室に入り、教会の牧師とたつた二人きりで、祝賀の午餐を共にしていた。部屋の外では少年鼓笛隊が祝賀の演奏を続けていた。

こんな風景が日本で見られるであろうか。総理大臣が、いや平大臣でもいいが、誕生日にお寺の和尚とたつた二人きりで昼飯を食うなどということ、聞いたことがあろうか。アデナウワーは、少くとも牧師と昼食を共にしている間だけは、俗事を忘れて、清らかな気持の一時を過したのであろう。政治のほんとうの力も、そこから出てくるのである。

もつとも、折角呼んで晚餐を共にして浮世のことを忘れようとした和尚が、俗息ぶんどんで、政治や金融の話ばかりしているのだったら、これはまた幻滅も甚だしからうが。

(不中庵主人)



仏教に生きる国の人々

白 幡 憲 佑

南の国の朝は美しい。淡紫色の空気は澄んで桃色の陽光が街角にさし込む頃、比丘達は黄衣の袖をなびかせて鉢鉢を抱え裸足になって托鉢に歩き始める。未だ眼りのさめぬ街を独り比丘達の歩く姿は南国を旅する人の心を強く打つものがある。

私はビルマへの旅の途中、バンコックのホテルの窓から此の光影を眺め、あゝ仏教の国へ来たのだという気持を深めたが、此の印象は、それからの一カ年のビルマ生活、そして東南アジアの各地を旅した間にも朝を迎える度に私の心を強く締めしめたものである。

ラングーン郊外のカバーエにある私の僧院には丁度、仏典結集が開れておった為各国より五百人余りの比丘が招れて来ていた。

比丘の生活は日の出と共に始るといわれる様に毎朝五時になると朝食の報せを版木が高

らかに告げると四つの僧院から。ぞろぞろと比丘達が大食堂に集ってくる。私は比丘になって初めての朝、友人と共にこの大群に混じって食堂へと出掛けたが、驚く事に早朝だというのに路の両側には数十台の自家用車が置かれ二、三百人の日本的に言えば善男善女という人々が土下座をして食堂へと歩む比丘達を礼拝しているのである。その路は放牧の牛や野犬の糞で汚れ、悪臭に充ちておるのに人々はいさいかまわず座りこみ礼拝し続けるのである。可愛い娘さんの黒髪に挿したジャスミンの白い花が礼拝する度に汚物に触れても娘さんは一心に拝み続けている。

或る日、私は一人の青年をつかまえて、「君達は毎朝、土下座をして礼拝するあの路を何故、清掃しないのだ」と質ねた事がある。その青年は、暫らく困った様な顔をしていたが、

私達の住んでいる世の中には汚いもの、悪いものが沢山あります。一つの悪いものを取り除けば、直ぐに新しい汚れたものが出来てきます。然しこの汚い世の中に負けずに私達は生きていかねばなりません。その為に仏陀は尊い法を説かれておるのでしよう、礼拝する時の心は法を求める心です。そこには汚物も何も眼に映りません。と答えて私の瞳を見つめた。まさに禅僧の一喝を浴びた様である。牛や野犬の糞に汚れた道を現世と想い、それらを踏みしめて、ひたすら、やすらぎを求めんと拝むあの姿こそ、本当に法を求める人の姿なのかも知れないと思えた。

この光影は私の九カ月の僧院生活の間、雨の日も風の日も続けられたのであった。早朝の路を歩くと時折、路端に黄衣や草履を重ねた施物の包みを見出す事がある。

これはパンクター(路上の喜捨)といわれ
て、多くの比丘へ布施する事が出来ぬ為

る。街中は夏犬の如くハアハアと息づいてい

その日の朝、最初に
出逢った比丘に布施
する事によって功德
を願うといった貧者
の一灯ともいうべき
ものであるが、此の
布施をする人は決し
て比丘に言葉をかけ
たり、特定の比丘の
来るのを待って布施
するのではなく、仏
法僧に布施する事
によってニルバーナ
を願う気持で行れて
るのである。

黙って施物を頂き
通り過ぎる比丘の後
姿を菩提樹の葉陰か
ら礼拝している人々
の姿も南国の朝を美しく彩るものである。



る。街路樹の下で砂糖キ
ジの汁に氷を入れて売
男のかん高い声が暑さ
を、ひとときわあおる様
ある。馬車の鈴の音も夢
を与えず、むしろケンソ
ウの感を抱せる。一月と
いうのにセクパンの真紅
の華は咲き乱れている。

こんな暑い或る日、私
達はウウチヨウニエン工
業相の官邸へ招れた。ロ
イヤル湖に面した官邸は
嘘の様に快適な風が吹い
ていた。

レンガ造りの建物の階
段を昇って仏間へと通る
とその入口の廊下に一人
の少年が膝づき、私達の
足を冷くひやした布で丁寧
に拭いては会しゃ
クをしているのである。やがてお茶が出され

アミダさまのミイラ

数年前、奥州、平泉の中尊寺に保管されて
ある藤原一族のミイラを、新聞社のスポンサ
ーで科学的に研究したことがあった。黄色の
棺の中に横えられた清衡、基衡、秀衡のなき
がらは、記録映画にとられて、私共もこれ
をみる事が出来た。また、先頃、探検映画に
インカ帝国の遺蹟が出て来、洞窟の中に、そ
のままの姿でミイラとなった、インカの舞姫
の形が写されていた。ミイラというと、私共
はすぐ、エジプトのピラミットにおさめられ
ている、エジプト王の幾つかを思い浮べる。
そのどれをみても、みんな、ひからびた、
骸骨に皮を張った、猿の化物のようなものば
かりで、気味悪くこそあれ、これがかつては
威勢あたりを払った大王だとか、男性の魂を
とろけさすような美妃だったとは、義理にも
思えぬものばかりである。

また、「ミイラとりがミイラになる」とい
われるように、ミイラのあるようなところ
は、人跡未踏の、未開野蛮なところで、うつ

て談話をしているとウ工業相夫人が一人の少年を伴って私達の前に座った、その少年をみると驚く事に最前の足を拭いていた召使いの少年なのである。夫人はげんそうな私達の顔を見ながら、皆さん、これは私の家の長男ですと紹介されて再び私達は驚いてしまったのである。仮りに工業大臣の御曹司が招れたとは云え外国の青年僧の汚れた足を拭くとは。その訳を質すと仏に仕える比丘に奉仕する事によってこの少年が正しい人生を歩んでいく事を祈るのであるといわれた。やがてはこの少年も父の跡を進んで政治家になるかも知れない。然しこの少年は困難な政治の仕事の中にも正しい人生を歩まんとする仏教の精神を必ず生かしていく事であろう。そんな事を考えると、例え機械文明に一步の遅れを持つとはいえ、この様な優れた心の持主によって包まれていく此の国に限りない羨望を覚え、窓外に眼をやるとシュエダゴンの金色の大塔が全ての人々の歩む道を示す如く輝いていたのであった。

シュエダゴン・パゴダはビルマ人の心の故郷と教えられ、ラングーンを中心の丘に金色

にそびえている。高さ三百フィートを誇り、尊のお髪の毛が祭れている。この国を訪れる人は必ずこのパゴダに詣でている。人々は裸足になり二百数十段の石段を昇っていく。浅草の観音様の様に両脇に土産物やが店を出しておるが殆んどが経典や珠数などの仏具であり、毎日、大変な混雑を呈している。各国の外交官や政治家などの顔をよく見かけるが、特にソ連のブルガーニン、フルシチフの両氏がシャク熱の陽光に照りつけられて、静かに頭を下げていた姿は、複雑な印象を与えたものである。

このパゴダには世界第二といわれる大きな梵鐘がつられている。

いまから百年程以前に英国が植民地化をはかっておる時、全国民にキリスト教への改宗を迫ってこの梵鐘をイラワジの支流であるラングーン河へ投げ込んでしまったのであった。然しビルマ人はこの英国の権力に屈せず、原始的な竹綱とあさなわを以って見事に堀り上げて再びシュエダゴンに祭ったと伝えられ、如何なる圧力にも負けずに仏陀の道を渡り通したと人々は誇しげにこの話を聞せる

かりのこの出かけて行くと、帰れなくなってしまうようなところが多い。

そんなわけで、私共にはミイラとは余り御縁がないのだが、ところかわれば風かわるで、ミイラを毎日拝んだり、お供物を上げたりしている民族もある。しかもそれが、南洋やアフリカの野蛮人ではなく、私共と同じく、立派な「仏教徒」なのだから、少々おどろきである。

一昨年、文部省の学術探検隊が、ヒマラヤ山脈の南側の傾面に位するネパールを調査してところ、その山村の寺々には、いずれも金泥のアミダ像が飾ってあった。ところが、段々しらべてみると、その中の或るものは、胎内に人間のミイラがおさめられてあることがわかった。大体、その地方の風習として、有徳の坊さんがなくなるとミイラにして、その上から泥をぬり、形をととのえて、絵具などで彩色をして「アミダ像」をつくるのである。いってみれば、人間をしんにした「ぬいぐるみ」のようなもので、これを本堂に安置して、拝んだり祈ったりする。

もっとも余程えらい坊さんでなければ、そ

のである。私はこの大きな梵鐘を仰ぐ度に、あの大人しいビルマ人の何処にその様な熱烈な、信仰の力が燃えているのかと不思議にさえ感じたのである。

いまもなお、消える事なく静かな鐘の音は金色の大塔と共に人々へ仏教の尊さを伝えているのである。

四カ月に亘る雨季が去り、華やかな火祭りを迎える頃ともなれば南十字星が夜空にダイヤの輝やきを誇り星くずはこぼれるばかりの光りを投げ与えて殊更に南国の夜をジョ情的に包むのである。

家々の門口や街路樹の枝に赤・緑・黄といった煩灯や豆電球を飾りつけ、人々は美しく粧って僧院やパゴダを訪れる。日本の盂蘭盆を偲せるものがある。日頃は静寂な僧院にも豆電球が飾られ、比丘達も久し振りの休日を楽しむのである。どこの家も御馳走を作り、お客を呼んではにぎやかな歌と踊りが深夜迄くり展げられるのである。

いまから約五百年前、ラングーンをタゴンと称していた頃、ラングーン河の対岸にテンニンという都があった。その都にはシンモエロン（月の如く麗しい姫）といわれた美しい

王女がおった、その王女をタゴンの王子メナングダが、人知れぬげに恋する様になり、毎夜、ワニに乗って王子はシンモエロン王女の許へとかよったが、王女の両親はこの恋を許さず、或る夜の事、嵐の中を王子はワニにまたがり最後の求婚に出掛けたが、大波にのまれ王子は何処へか流されてしまった、やがてその死体がテンニンの都に流れつき、王子の死を知った王女は恋の悲しみに自らの命を絶つてしまったのである。人々はこの美しい恋に泣き、テンニンの中心にある小さい丘で二人の遺体をタビにふした。その火は中空に高く燃え上るや二つの焰が一緒になり、なお高く高く燃え上り夜空をこがしたのであった。

この悲恋物語が火祭りの始めといわれているが、いまは、悲恋ではなく数多くの恋の華が火祭りの夜に咲き競うとの事である。

若い恋人達は、あゝ悲しシンモエロンよ、の歌を口ずさみ乍らパゴダへ悲恋に散った王子と王女の霊を慰めにいき、老人達は僧院へ比丘のお説教を聞きにいく事が火祭りの慣しとされている様である。

ともあれ、夜更けの空に豆電球に飾られた金色のパゴダは、生きる苦しみと闘う人々に限りないやすらぎを与えるものである。

う簡単にはミイラにするわけではないから、その数はごく少いそうである。

ミイラといえは猿の化物と思っている私共にとつて、ミイラがアミダさまになったのであればありがたく頭をさげることが出来よう。

光寿無量とて、御功德も御寿命も無量無辺なアミダさま。ミイラのアミダさまは少くとも、寿命だけは無量であらせられるわけである。それにまた、一生懸命に修行して、えらい坊さんになれば、死んでからミイラにされて、いつまでも、信徒達の尊敬のまこととなり、拜んでもらえるということになれば、仏道修行にも、一段と熱が加わろうというものである。

おわび

先般来、読者の皆様より、本誌昨年、十一月号についての間合せをいただいておりますが、十一、二月号は休刊させていただきましたので御了承の程をお願い申し上げます。



第一話

身がわりの躰

中野 隆 雄

さつきからお仏壇の前に、放心したような幸子が座っていた。ろうそくもお線香も、とつくにたってしまったのに、幸子は立ち上ろうとしなかった。先生から串男の話を聞いた時には、自分でも血の気が引いて顔の青ざめるのが判った位であった。口惜しかった。しかしお仏壇の前に長いこと座っている間に、どうやら気も静まったようであった。

今日は土曜だというので、串男の担任の先生が家庭訪問で立寄ってくれた。その時に、先生の話したことはこうであった。

ある日、学校で図工の時間に「母の顔」と題して生徒に絵をかかせたものである。やがて生徒たちは、自分のお母さんの顔を思い出しながら精一杯に美しくかいているらしい。先生は生徒たちの段々仕上ってゆく絵をみながら愉しかった。先生からみればどの絵にも特色があつて、似てないまでも、髪かたちに

それぞれ別の意味がでているのであつた。しかし串男の絵をみて、先生は目をみはってしまった。

「串男君、その絵はお母さんらしくないね」とすると串男は下を向いて何も答えない。

「串男君、思った通りに画けばよいのだよ。上手下手というよりも、思ったままを画きなさい。」

先生がとりなすつもりでいうと、

「先生、これはお母さんの顔ではありませんん」

「串男君はどうしてお母さんの顔を画かないの。先生のいった題ではないのかね」

「これは僕の好きな人の顔なんです」

「好きな人……」

「お隣りの床屋の小父さんの顔です」

「まあいいよ、そのまま画いてごらん」

先生はその場をそれですまして、後で串男

を呼んで質ねてみると、串男はこんな意味のことを訴えたというのである。

串男は母親を特に憎んだり、嫌ったりしていることは全くなかった。先生から母の顔を画けといわれて、さてどう画かうかと頭をひねってみると、どうしても画けない。串男の頭に浮んでくる母の顔は、どれもこれもこわい顔になってしまう。こわい顔なんて画けもしないし、画く気にもならない。いろいろ考えている内にふと隣りの小父さんの顔が浮んできた。小父さんの顔はいつもやさしく笑っている。それで特別の意味もなく、小父さんの顔を、頭に浮ぶままに画いてしまったというのである。

この先生の話聞きながら、まず幸子の頭にピンときたことは、幸子が継母であるということであつた。

串男の実母、つまり先妻は六年前にガンで死亡している。なんでも長く病んでいて、三回も手術したとかいうので、普通の商人としては、この病人だけで救われ難い貧乏になつてしまった。かたばかりの葬式も近所の人たちの情で出せたものであつた。

串男が生れた時には、実母のガンも事実上はかなり進行していたらしく、生れながらに弱い児であった。それが間もなく実母に別れ男手一つの世話では、どうにもならず、一度は下痢と栄養失調で死にかけたこともあった。

幸子の夫、鉄郎は、温良で近所にも好かれていたが、腕さきというでもなく、細々と生活している身には、妻の病死、串男の養育で参ってしまった。こんな具合で店の方も以前よりさびれてしまった。

幸子が後妻として鉄郎のところに来たときは、家の中は豚小屋のようであった。目さえ覚していれば、ピーピー泣いてばかりいる串男を抱いて、病氣あがりの赤児ばかりでなく、鉄郎までが半病人に見えたものだった。

幸子はとくに特色のある女でもなかったがただよい点としては信仰心が篤かったことである。事実また一家をここまで再建したのは幸子の信仰心の賜ものであった。幸子はまず

掃が第一だった。たとえお粥や代用食にしても、必ず仏さまにあげてからである。朝起きて、夜寝るまでご仏壇を中心に生活をたて直して行つた。近所の人たちも、こうした幸子の態度に好感をもったとみえて、商売の方も段々旧に復して行つた。

その次に幸子の努めたことは、串男を丈夫に育てることであつた。幸子が鉄郎に縁づいた時には、串男は数え年四歳だというのに、足も立たなかつた。幸子のご仏壇にお詣りして、こう誓つた。

「見ていて下さい。貴女の心残りは、私が替つて必ずなしとげましょう。串男もきつと丈夫な男に育ててみましょう。どうぞこの一家が立ち直るように、仏力をおかし下さい」

一寸したことでも、すぐ串男は熱を出す、食欲が振わない。家事一切を仕切つてからの医者通いが何年続いたか知れない。それに困つたことに、串男に夜尿症があつた。その手当がまた並々でなかつた。一年間に布団の三枚も作り直し、毎夜寝る前の注意、毎朝の仕末も骨が折れる仕事であつた。

串男が小学校二年になったとき、運動のた

めに、毎朝三十分づつ馳ることにした。最初の一年は幸子も一諸になつて馳けた。朝早く串男が幸子とともに馳けている姿をみて、近所の人たちは逆に眉をしそめた。

「あんなにしなくても……」

「子供に無理をさせれば、かえつて健康を害するのにな……」

「温くかわいがることができないかね……」

そして結局は

「やっぱり、継子には思い切つたことができないのだよ」

という陰口になる。こんな話が耳に入る度に、幸子は仏壇の前で、そつと涙をふいて「私の努力がたりないのです。貴女から預つた子を立派な子供にしたい一念で努力しています。どうぞお守り下さい。お許し下さい」とお位牌の前で祈るのであつた。

涙をかくして強い瞼け、ただただ健全な子供に育てあげたい一念だった。

串男はやがて三年、四年となつて、学校の成績が上つた。更に五年になつて、成績もよく、性質も明るくなり、友人ともよく遊ぶようになった。しかし無口であつたが、素

信仰実話

家の清掃と
いうよりは
お仏壇の清

信仰実話

直によく幸子のいいつけを聞いて

くれた。無口なのは鉄郎に似たのだろうと思つて気にもとめていなかった。

今朝もやはり同じ日課であつた。風が寒かつたが家の前で幸子が待っていると、串男は元気よく馳けて帰つてきた。串男は幸子の前で立停るとニッコリ笑つた。

「さあ、早く家に入つて、風邪をひくといけないよ。汗をふいて、シャツを改めて……」

と幸子は串男を抱きかかえるように家に入つた。串男が幸子の胸にハアハアと息づくのに、幸子はこれだけ丈夫になつたという満足感をおぼえた。

「さあ、朝の運動が終つた。この元気な姿をあなたのお母さんにお見せしましょう」

と仏壇の前に座つて一諸に掌を合せた。

やがて親子三人の楽しい朝餉に、鉄郎は

「串男、丈夫になつたな、これもお母さんのおかげだよ」

といった。

今日は土曜だからと、心待ちに串男の帰り

を待っていたのに、それより先きに先生がきての図工の話であつた。

自分の顔が画けなかつたからといって、幸子は串男を憎む気にはならなかつた。日常生活から串男の気持も知っているつもりであつた。しかし串男が思い浮べる幸子の顔が、いかめしい恐いものとの点ではショックであつた。幸子は気が鎮まるにつれて、今まで串男を丈夫にとだけ念じて、子供の心の発達を見落していたことに気がついた。

いつになく、串男が遅く帰つてきた。そこで幸子が、さっき先生がきて下さつたこと、図工の時間に床屋の小父さんの絵が大変上手に画けたことを話した。すると串男は

「ごめんよ、先生はお母さんの顔を画けといつたのだよ」

「そう、だけど画き易い絵を画いた方が正直でいいんだよ」

「今度きつとお母さんの顔をかくよ」

幸子は思い切り温しく話したのに、串男はワッと幸子の膝に泣き伏してしまつた。

「いいえ、お母さんが悪かつたのですよ、もう泣かないで、それよりご仏壇にお線香をあげましょう」

幸子は、母親は勝気ばかりがよいのでないと思つた。幸子は串男を抱きしめて熱心にお念仏をとなえていた。いつか串男も幸子と一緒ににお念仏をとなえていた。



第二話

妻恋う念仏

編集 部

申し訳ない話だが、今日のお墓詣りは十年ぶりのものであつた。それもお墓詣りといえるかどうか、妻と長女のお骨を芝増上寺の納骨堂にお預けしたまま、今日まで放つておい

たわけである。もうしばらく待つていてくれ一日も早くお前たちを迎えに来て、来年の十三回忌は、必ず故郷のお寺で勤め、お前たちを安心させるから、と今日という今日は、納

骨堂の前で誓ったことである。

妻と長女には苦勞をかけたまま、遂に一日も樂をさせなかった。それなのにお骨まで、よその土地に放り出したまま今日になってしまった。しかし今日からは私も変わった。自然にお念仏が口をついて出た自分に、私も驚いた位だから、お前たちも信用してもらいたい。

光子と結婚したのは、福岡で中学に奉職している時であった。これまた結婚といえるかどうか。光子が土地の小町として騒がれていたことは前から知っていたし、学校の近くで何回も見かけたことはあった。しかし光子の方で私を知ったのは、私の担任する學級に彼女の弟が入ってからである。初めのうちは彼女の評判が高かっただけに、美しいということと以外に興味を持ったわけでないのに、どうして私が彼女と一諸になったのか、縁はなものというより外にない。

私は彼女の父親には、全く手古ずってしま

信仰実話

った。父親にしてみれば、私が色

師であり、ならず者であり、要するに教師に相応しくない他所者に過ぎなかった。それに彼は土地の顔役であったので、まさに私が非国民に見えたらしい。戦争中に若い教師が色恋とは何事ぞというわけで、問題にならぬ不祥事と考えたものらしい。

また光子が苦勞させられた相手は、校長であった。校長ばかりでなく教職員の大部分の態度が、彼女を苦しめたについては、ほんとは私の責任であった。私は他人の思惑などを気にしない、議論好きな、鼻もちならぬ高慢な教師として同僚から嫌われていた。老練といわれる先輩たちを侮べつしていたので、彼等の真似はまっぴらであった。先輩たちが戦鬨とゲートルに身をかため、生徒たちを追い廻すというより、自分たちがキョロキョロ手足が宙に浮いていた姿を、私は憐れなものとみていた。その私が、先方の親の許さぬ小町娘と仲がよくなったのだから、学校あげての冷遇を受けたわけである。

だから私と光子は、世間の恋人のような楽しみは一度もなかった。ふりかかる万難を排除するための日日で終った。その中を私が強

引に光子と同せいしたからたまらなかった。私たちは、堂々と天地に恥ない行動のつもりでいたが、私たちの周囲は私たちを救いのない犯罪者として取扱った。

結局、私たちは新天地を求めて福岡を逃げ出さなくてはならなかった。狭い町で不快と苦痛に耐えなくなったばかりでなく、生徒の顔にまで暗いものが感じられたからであった。東京にでようと私たちの意見が一致したとき、そのまま校長にも親にも告げず家を出た。雨のそば降る暗い駅で、四囲を憎悪でかこまれながら、私の握っていた光子の体温が、今でも掌の中に感ぜられる。

東京に着いて間もなく、その時すでに東京は疎開を急ぐべきであって、私たち如きものの移住に適さないことを知った。

しかしそれでも、戦争中は仕事があった。一杯の雑炊を購うために、長蛇の列に加った。食堂には椅子がないので、誰もが立食ですすり合った雑炊も、私には美味しいものとして食べられた。

やがて敗戦となり、東京がこんなにもこわれってしまったかと、焼の原に改めて立った時に

信仰実話

は、私たちも他の人々と同様に職

もなく食べ物をさがして歩き廻った。

こうしたある日の夕方、私たちは広くて淋しい芝公園の中を歩いていった。ふと気がつく、そこに公衆便所があつて、便所の中に工員らしい若者が二人も住み込んでいるのを知った。若者たちは、私たちを一目見るなり私たちの境遇が判つたらしい。私たちは、若者に頼んで、この便所に一諸に住まわせてもらうことにした。

工合のよいことに、公衆便所には必ず入口が二つあり、中は間切りができてゐる。水道はあるし、押入れが沢山にある。囲りに老樹が繁つて、閑静なばかりでなく薪に困らない。更に通風がよく、冬は狭くて暖いに違いない。第一、雨がもらない。早速ながら私たちは、先住の工員を見ならつて板を打ちつけ、ご座を敷いた。男便所の方を工員さんたち、女便所を私たちとして、三世帯が同じ所に暮すことになった。東京に来てから安宿を転々としていたのだが、とに角住居がきまっ

たわけである。もとは便所であつても、溝の中、塀の内側等に野宿を続けてきた私たちにとつて、まさにコンクリート造りのアパート位と同じわけになったのである。住居ができるということは、風雨に苦しむことのない素晴らしいことで、それだけで勇気が湧いてきた。

それから私たちは夢中で働いた。働くといつても屑鉄拾ひである。東京の鉞脈という言葉があつた位で、焼跡を堀り返してゆけばいくらでも屑鉄を拾うことができた。少し位の雨ならば休まず働くことができた。

光子もよく努めてくれた。一諸に働きにゆくことが多かった。彼女は生来強気であつたので逆境にも強かつた。よく順応するというより、あくまで難関を切り抜けてゆく力を持っていた。私たちは毎日の生活に張りを感じ合つた。また他面には、私が初めて彼女の女らしさ、やさしい温みを感じたのもこの時であつた。やがて冬になり、春となつた。おかしな話だが、私たちは小使錢を蓄えるまでになつてゐた。いやもつと私を喜ばせたのは、彼女が妊娠したことであつた。

經典 説話 親知らずの人生

離所があつて、その地名も「親知らず」とある。親知らず子知らずの言葉からつけたものであるが、親は子を、子は親を省みる余裕がないことだから、これほど最上級の形容は他にない。しかしこれはいくら極端とはいへ形容にすぎない。身体で、または腕の力で親子が互に助けられないといつても、例えば声で励まし合うことができ、声がかけられなくても他人の助力を仰いでもお互に助け合うことができる。

こんな難所を通るより、もつと親知らず子知らずの場合がある。それは大火災と、大水災と、大盗難の三つの時である。これらの災難は不幸にしてわれわれの経験ずみのことばかりである。

関東大震災の折、紅蓮の炎に包まれた上野の森で、夜を徹して互に呼び合ひ、叫ぶ声がこだした地獄図があつた。また、焼跡にはお互の安否を質ねるはり紙が、点々と見られた。更に大空襲の時には、防空壕が

焼跡を掘り返す仕事は根仕事であるし、他から見る程楽なものでない、腰も痛むし手首も痛む。しかし身体の疲れは一向に苦にならなかった。それよりは秋までには、芝公園を引き払って何こかに間借りをしたい。いくら快適だといっても、便所は便所である。いくら仕事といっても屑鉄拾いは屑鉄拾いである。煙草の吸いがら拾いといくらの差がある。生れてくる子供に見せたくないのは当然である。

その内に、お隣りの工員さんの一人が香具師のさくらになって、屑鉄拾いから足を洗った、あるいは遇連隊の仲間入りをしたのかも知れなかった。そこにゆくと私たちは僅かの教養が邪魔したらしい。早く転居をするために、外に途があったであろうに、それができなかった。何はともあれ、この屑鉄拾いの期間が、私たちにとって希望の持てた一番幸福な時期であった。

信仰実話

この時分の苦勞は食物であった。まして私たちが栄養が十分とれなかったの

も無理はない。特に妊婦にとっては致命的な影きようがあったらしい。

秋になったある夜、光子が急に産氣ずいた。私は驚いて施療病院まで、おぶって連れて行った。しかし残念ながら赤児は早産のため死んでしまった。女児であったが、小さな淋しげな死顔をみながら私は泣いた。

何故お前は死んだ。恐らく赤児に口がきけたら「それは親の栄養不足さ、わたしだって生れた以上は活きたい氣持は大人と同じさ」といったらうと思う。それとも「十カ月お腹においてくれたら、わたしは死にはしない」といったかも知れない。

光子の落たんは当然のことだった。父親の私には判らないが、姪しんした日から出産の日まで、母親のたのしみ、希望、誇り等々を抱いていたろうに、赤児への同情より自分へのやりきれない氣持が大きかったと思う。光子は何が原因したのかは別として、日に日に目に見えるように衰弱して行った。そして光子は産後旬日にして、赤児のお骨を粹もとに安置しながら息を引きとった。

病院や民生委員の方々のおかげで、私は二

火に包まれて、この猛火をくぐり抜けた主人独りが大火傷したとはいえ助かって、他の妻子は全部焼け死んだことがあった。更にまた赤児をおぶった母親が、川から救い上げられたときには、母親も知らぬ間に赤児が死んでいた。こんな話は挙げると数限りなくある。しかしこんな災難も、絶対的な親知らず子知らずの場合ではない。困難ながらも手段をつくして親を助け、子を救ってきているのであって、ほんとの親知らず子知らずではなかった。

真に親と子が、全く離ればなれになる場合がある。それは老の恐れと、病の恐れと、死の恐れの影響にたつた三つの場合である。

親の老いてゆくのを、子として如何にしてもこれにかかわることができない。子供の病氣は親の病氣と同じだというけれども、子の病む姿のいじらしさに泣いても、親はこれに代って病むことができない。親の死子供の死も同じことこれにかかわることができない。この三つこそ、まことに親知らず子知らずである。

信仰実話

つの骨箱を
かかえて帰
ってきた。

増上寺の境内のベンチに放心したまま腰を下
していた。正午すぎであったのか、勤め人ら
しい人々が三々五々前を通って行った。

ふと気がつくと、同じベンチに腰かけてい
た人が、私にどうしたのかと質ねているのに
気がついた。私は妻と長女を一時に亡した話
をすると、その人は私にお骨を持ってくるよ
うにとすすめた。やがて私が両腕に二つの骨
箱を抱えて、再び境内にもどってくると、そ
の人は洋服の上にお袈裟をかけて、私を待っ
ていてくれた。その人のおかげで、妻と長女
のお骨を増上寺の納骨堂に納め、ご回向まで
してもらうことができたのであった。その後、
私はその人に礼一つしなかったことを後悔し
たが、一年たち二年たち、納骨堂にお詣りを
しなくなつてから更に十年がたつてしまっ
た。今こうして同じベンチに腰を下してみる
と、周囲の様子がまるで変つてしまった。社
会の変遷が、この境内にも及ぶことを考えれ
ば当然かも知れない。しかし増上寺の山門、

鐘楼そして寺務所の風景は昔ながらである。

あの時、納骨堂の狭い入口から階段を降り
て行つて、うす暗い廊下に立つて、金庫のよ
うな鍵のかかる所にお骨を納め、洋服に袈裟
がけの人に回向をしてもらい、後から合掌し
ていた自分の姿が、目の前に浮んでくる。妻
が息を引きとるとき、赤児の骨箱と私の顔を
眺めながら、私に感謝して、嬉しそうに笑つ
た力ないあの顔も昨日のように思い出す。つ
いぞ愚痴一つこぼしたことのない妻であつた
から、何んなことにも喜んでくれ、喜ぶこと
しか知らないような妻であつたから、あの時
も笑つたと見えたが、ほんとは泣いていたの
かも知れなかった。かわいそうな光子、何一
つしてやれなかった妻が、苦勞だけをして逝
つてしまった。生れたばかりで死んだ赤児、
名前一つつけてやれなかった長女であつた。
いつまでもお前たちを一時領けにしておきは
しないぞと固く心に決めた。

丁度折から、法要でもあるらしく、本堂か
らお念仏の音が聞えてきた。私は幼少の頃か
らお念仏の声には耳なれていた。私の生家が
お寺の裏にあつたからである。福岡のそのお

寺も、当時は若い住職が納骨堂を新築すると
かで評判がたつていた。もう立派に落成して
いることだろう。今ここでお念仏の声を耳に
してふと福岡を思い出したのは、決して偶然
とは思えなかった。気の毒な妻と長女を思い
出しているとき、はつきりお念仏の音が耳に
とまつた。私はお念仏の声に力をかりて、妻
と長女と一諸に私もまた福岡に帰ろうと決心
した。福岡に帰れば、進学生徒の塾でも開き
たい。いやその前に農家の手伝いをしてもし
い妻も長女も福岡の墓地に埋めてやれたら、
せめては喜んでくれるであろう。こう考えて
くると私が久し振りにお墓詣りをした心のゆ
とりが、更に私の喜びにかわり、その心が段
々にふくらんで空一杯に拡がるように思われ
た。私の前を通る人たちも、山門も何もかも
私の目から消えてゆくようであつた。妻と長
女と私と一諸になつて明るく希望の雲にの
り、遠くにとんでゆくように感じられた。そ
の時、私は意識しないで自分の口からお念仏
が唱えられ、その唱名の声を自分の耳が聞き
つけて、ハッと思わず掌を固く合せたのであ
つた。

浄土歌壇

岩野喜久代選

天

鎌倉 大野 陽炎

秋湖僧正の喜寿の賀筵につらなりて山によせて祝ふ

はてしなき大空を背にやすらけく積むゆきかさね富士はそびえつ

評 清浄にして雄大、厳肅。七十、八十の齡を重ねるのは平凡人でも尊い。まして、道に志す人の長寿はわれ、ひと共に有難い。

地

裾野 洗 醜 隠 人

山門の空地に庭をしつらへりあらたに住地うつり来たりて

一坪にたらぬ庭とも思ほえずはるかに富士の從ゆるを見る

評 大自然を庭にとり入れて心ゆたか。

人

大阪 山村 綾子

朝晴れの山に噴煙たなびきて南薩摩の海清きかな

評 すっきりと快よい。南国の海と桜島山の美しさに作者は感動している。

東京 麻見 和世

君と居てことしも書など曝すべく

輝く秋の廊を清めぬ

鎌倉 松原 素月

彼岸会や御最後川を上り来るうし

ほに影をひたす初萩

東京 石黒 梢

ひとりなれば弁当箱に飯つめてひ

そひその食事ならひとなりぬ

沼津 小野 徳司

わが飽きて眠りしのちもをみなら

の衣料談義はつづきたるらし

藤沢 熊坂 満

曳船のまくろき煙灰色の空にをど

れど汽船動かず

東京 多田 勲

天井の雨もりの後輪をなして原子

雲のごとたがひにせまりぬ

神奈川 張山 はるみ

小包をひぎにひろぐるなつかしさ

もて眺めいる故里の文

鹿児島 長崎 恒子

遠足の子等水筒を肩にかけ朝霧の中より現はれ来る

福岡 阿部 キヨ

か細くも生命保ちて今日もあり尽すべき道示したまへや

青森 向井 きつ

オランダの風車おもはす井戸堀りの車めぐれり秋の背戸裏

岡山 野口 かずえ

背の児をばなだめつつ畑耕せる若き農婦に声かけて過ぐ

東京 上岡 歌子

湖の香の大川端にただよいてかもめ三つ四つ白く飛び立つ

高岡 八島 美雄

秋の舟われらをのせて巖門をくぐる時追ふ海よりの風

鹿児島 串岡 君江

肩こりて堪へられずと云ひし友なりき

りき極に土砂の容赦なくおつ

和歌山 高岡 愛子

知らぬ間にひきむしられしあぢさいの花を惜しみてわが立ちつくす

東京 鳴海 要吉

あきらめの旅なりしかど磯行けば白き燈台に目がさし居りき

雲はれてしづけき春の朝あけをほのかに焼けぬ沖への雲は

山形 佐藤 諦叔

くらき世のくらきやみ路にまよふ身も「浄土」を読みて光明を見る

選者 詠

椿咲き梅またひらくみ仏に祈られてあり花もわが身も

投稿規定

官製はがき一回二首以内とし、「浄土」編集部歌壇係あて、住所氏名明記の上送ること。

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一切贈呈します。
- 4 会費は、なるべく支部において括めて御納入下さい。



宇治の清流に沿つて

——白川の地藏院に詣でる——

石 上 善 応

定 頼

宇治といえは平等院、といわれる程、宇治の古刹の中では最も代表的なものとして知られ、他のお寺は蔭が薄くなっている。

もう一つ東宇治の黄檗の満福寺が有名なものとして挙げられるのが普通であろう。ところが宇治には数々の優雅な寺院が散在している。電車の中から、山なみの中腹に優

しい三重塔を眺めることのできる三室戸寺、この塔からの山城平野の眺望は実によい。普通、橋寺と呼ばれている道昭和尙の開山になる放生院常光寺。

興聖の晩鐘として、紅葉・山吹きで名高い興聖寺。それに恵心院、浄土院等。それぞれ異った趣きをもつて、山城の風景に融けこんでいる。平等院や満福寺があまりに有名なためか、これらの諸刹が宇治の良さを愛する一部の人々のみの憩の場所となつ

ているのはまことに嬉しいことだと言わねばならない。

宇治で仏像と言えは平等院鳳凰堂の阿弥陀如来を指さすにやぶさかではないが、私は忘れられようとしている白川の地藏院に安置されているみ仏たちを思い出してもらいたいと思つてゐる。

私が宇治を訪れたのは昨年の六月下旬のことである。京阪の宇治駅で下り、平等院が向うに見える宇治橋を渡らず、宇治川の左岸を上ることにしたのは、静かな路程を運びたいと考えている、いつもの私の癖からである。

袖の香や猶とまらむ橋の

小島によせし夜半の浮舟

太上天皇

朝ぼらけ宇治の川霧たへだへに

あらはれ渡る瀬々のあじろ木

しば舟の里は茶つみの水けむり 其 角
宇治は詩人だけのものではない。どんな凡人にも何か詩情を与え、心をゆさぶるものを見つけるに相違ない。ましてや、菟道稚郎子尊が^{わけいもつこのみこととおおききのみこと}大嶋鶴尊と互に位を譲り合い、ここへかくれられたというゆかしい古事、宇治十帳のあわれにみちた物語を初めとして、戦国時代の数々の物語などを思い出すに至つては、もういふ必要もないことであろう。この東岸には橋寺、恵心院、興聖寺があり、進むにつれて、宇治川の清流に沿つて、この寺々の入口にぶつかる。緑が実にきれいに見えてくる。天ヶ瀬のつり橋を渡つて、西岸を戻つてくると、山あいの岐れ道に「白川・白山神社入口」の石柱を見ることができた。宇治の清流によって気持



の土蔵に案内してくれ
た。本堂に安置されて
いるとばかり思いこん
でいた私にとっては、
これは驚きである。

このような所にも、
心ならずの者がやって
くるのであろうか、或
は燃焼を恐れての心づ

かいからだろうか。土蔵の中に作られている
安置所は網戸によって拝観者との間に仕切り
がなされている。坐って落着いて拝むことが
できないのが残念である。しかし、安置され
ている仏像の秀逸さは想像を絶していた。い
ずれも旧国宝級で、十三体の諸仏が静かに一
人の闖入者を待ち受けていた。

のやすらぎを感じ、その足で、はざまを三
分も歩いたであろうか。もう一面は白川の
田園風景が展開している。土地の人に地藏
院を聞けば、農家の間に見える一際高い屋
根を指さして教えてくれた。地藏院の門は
小さく、あたりの人家の門とは異っておら
ず、訪れた私の方が驚いた。只、門にかか
げてあった、地藏院の門標によって知るこ
とができたのである。それだから地藏院は
大きなお寺ではない。また観光寺院のよう
な、いかめしさも持っていない。全く近隣
のよき菩提寺という感じであるのは、私の
ようなものには特に懐かしみを与えてくれ
る。拝観を申し込むと住職夫人は脇の白壁

一体、仏像をこのようにして拝観するのは
僧籍に身を置く者としては邪道であるかも知
れない。確かに子供の時には毎朝の勤行がつ
らく、本尊の阿弥陀様がうらめしく感じられ
たものであった。特に祖父の勤行は厳格であ
ったから、余計反撥を感じたのかも知れな
い。しかし、今の私には、その時のことが非

常に懐かしく感ぜられて、柔和な阿弥陀様
を礼拝している自分を思い浮かべることが
多いこの頃である。仏像を拝むにも、その
人の気持の持ちようであることはいうまで
もない。路傍の石仏・金仏にも手を合わし
ている人から見れば、やはり私のような芸
術的に優れたみ仏を探し求めている行為は
叱られるであろう。弁解する気はないが、
素直にみ仏に手を合わすことができる今の
私にとって、暫くの間はお許しをえたいも
のだと思っている。歩き疲れた時、悲しみ
にみち溢れた時、心愉快な時、その時その
場合によって、同じみ仏が、慰めてくれた
り、ほほえみかけたり、悲しんだり、怒っ
たりして、私と同じようにオロオロ歩きを
してくれる。そして励ましてくれるよう
である。そのためか、私の仏像を求める放浪
性が続き、閑寂な寺院をさ迷い歩くのかも
知れない。

これらのみ仏の大半は元来、この辺の氏
神で白山神社に祀られていたものが、神仏
分離によって地藏院に移されたと伝え聞
く。ところで肝心の地藏院の寺伝をすっか

り失念してしまった。只、頭に残っているのはみ仏たちの良さと、浄土宗に所属するという話のみである。銅造の阿闍（あしゅく）如来は白鳳期特有の童顔をなさっておられる。やさしい体つきの中にお顔は叙智を秘め、鼻すじは実に自信にみち溢れておられる。それは慈悲深い容姿を保ちながらも、何ものにも動じない力強さが感じとられるのである。いつでもこちらの見方によつては、様々にみ仏の表情が変るように感じられるものであるのに、一尺余りのこのみ仏は、時には捉え難い感動を起させるのはどうしたわけなのであろうか。

このみ仏の隣りには美しい眉、小さな鼻と口許に微笑を浮べておられる阿弥陀如来脇侍像がおられる。いかにもあどけない子供のような表情で、いつまで見ていても飽きることを知らないほどであるが、軽く閉じたまなこにはすべての煩惱を超越した気高さが窺われ、何かしら自分がつまらない惨めな姿になってくるのを覚える。「しっかりしなさい！」仏は私にそう囁いてくれる。右手の半ば開かれた中に宝珠がそつと

握られているのが、いつでも救ってあげるよ、というような見え、同時に体の均勢が優しさの中に動きを見せてくれている。頑な生活を戒しめておられるようなみ手である。国立博物館の四十八体仏の系統を引く金銅仏であるのかも知れないが、そのお顔は洗煉されていて、法隆寺の夢違観音と鶴林寺の聖観音との中間をゆく微笑をたたえている。橘夫人の念持仏というよりは四十八体仏に見られるような蓬莖の上の蕾にしっかりと立っておられる。私はこのみ仏に大半の時を費したようだ。

このみ仏の後には木造の十一面観音が気品を見せて立っておられる。全くたびたび若い女性の中に求めることのできるお顔である。その口許は女に印象的である。口許をちよつとすぼめたようで、女性のすねた口形に似ているようでもある。それでいて神々しいのは仏に魂があるのか、それとも仏師が優れていたのであらうか。前の白鳳仏と違い、藤原時代の作の典型的な一つのタイプといえよう。このみ仏は白山神社の本地仏であったが、神仏分離で本院に移された由。他のみ仏の一つ

一つはとても書きつくせるものではない。もう一軀の十一面観音の端麗なこと、銅造の釈迦坐像、元興寺の釈迦像を思わせる阿弥陀立像、木造の観音の来迎像、珍しい一尺たらずの大威徳明王坐像、等々。それに板彫の正確な両界曼荼羅。どれもがお寺にふさわしく、小形のものばかり、仏像の中から可愛いらしいものばかりを選んで並べたという感じがする。

みほとけはいまもいまさばわがために
まなこすがしくまもらせたまへ

みほとけは違つても、会津矢一のこの歌はそっくり、これらのみ仏の前で詠じたくなる。期待以上の壮観に、全く私は驚きと嬉しさに浸っていた。たった一人でこのように優れた仏像に接していられるとは想像をはるかに超えていたのだ。久しぶりの感興を桿一本の舟に托して、宇治川を静かに下っていった思い出は今尚はつきりと描きだすことができる。

（写真は地蔵院の観世音菩薩）

内山憲尙新著

「童話学入門」紹介

童心即聖心

内山憲尙氏の書齋を訪れた人は知っている。氏の四壁書籍で埋もれた書齋の、わずかに残った壁面に「童心即聖心」

と、あの氏独得の書体で、自筆のモットーが太竹に刻まれてかけてあることを。

モットーというものは、仲々に実行しにくからこそモットーなのだが、内山氏の年来の業績をみていると、正にこのモットーが如実に生かされていることが知られるのである。氏の童話の実技が、正に童心そのものの中から輝き出て、これをきく子供等が、本当に楽し気に恍惚としている風景を、私はよくみかける。氏が童話というものを、このような理解の仕方ですべておられるのを、目のあたり見た思いであつた。そうした内山氏の殆んど今までの生涯をつらぬいて流れて来た思想が一つの学問の形にまでまとめ上げら

れ、「童話学入門」となされて公刊された。

人というものは、すれば何でも出来るものである。しかし、本当に、その人だけにしか出来ないこと、そしてそれを思い定めて、これに打ち込んで行くこと、これはまことに容易ならぬことである。童話を話す人は多い。

童話を論ずる人も少くない。しかし、内山氏のように、その生活の全面を、その思想の根柢を、全部あげて童話学の大成に打ちこんで来た人は、氏をおいてない。氏が本書を捧げておられる芦谷重常氏の業績以後、たえて久しくと切れていたこの道を、三十年来蒐集に蒐集を重ねた貴重な資料にもとづいて、新しい内容と新しい理念のもとにまとめられた。本書は総頁数にして三六〇頁、著書としてすでに六十七冊をも公刊されている氏にとっては決して大著とはいへぬ。しかし、量は質を決定するものではない。この珠玉のような好著が、日本図書館協会選定の良著に指定されたことむべなるかなである。

当今、宗教々団の新しく生きる道として、児童教化の面が大きくとり上げられ、寺院にして教育機関を併設するもの、その数少く

い。ことに、本宗は他宗にさきがけて多く斯道の先輩を得て、ますます盛んになりつつある。しかし、真にこれ等先輩の真意を生かして行くには、幼児保育の本義を充分に認識しなければならぬ。単なるみせかけの、或はお義理のものであつてはならない。これこそ「童心即聖心」の真意を以って、これに尽せねばならない。

幼児保育の中樞をなすものが童話である。幼児のやわらかい心にぎざまれた、美しく、やさしい物語が、いかにその生涯の後々まで深い影響を与えることか。

しかし、本当に自分の思っていること、考えていることを、ありのままに人に伝えることはむづかしい。ことに、相手が幼い子供の場合、私共はとほうにくれることがある。

童話はただ話す文ではない。童心の中から語りかけねばならない。そうした時、童話というものを真実に理解し、その理論的性格を充分に身につけてなければならぬ。内山氏の「童話学入門」こそ、こうした基礎的心構えを涵養する何よりの、そして他に求められぬ尊いものを持っている。



信仰の中心

— 無量寿経講話(完) —

佐藤 密雄

人間の生存が「何故に生老死に支配されるのか、又はこれが人世苦になるのか」の問題を追求したところに釈尊の悟りがありました。前回に述べた通り、苦は合計八苦となりました。

それで人生は四苦八苦となりますが、その原因は渴愛という煩惱ですから、この四苦八苦の意味は単純に老や死が苦であるのでないことが知られます。渴愛とは、人間の生存のための欲望のことです。自我心の発する生存欲であります。そこで渴愛から生ずるこれらの苦というのは、生老病死などの事実でなく、それらの事実を苦とする不満の悲しみのことであるとせねばなりません。人生苦を滅して生死を解脱すると申しますが、実は、生死する事実をなくすることではなく、生死を不満とし苦とすることのなくなることであるとせねばなりません。

仏教で無我といい空と説きますが、自身の肉体を消滅させようとか、そこにあるものを目を閉じて「無し」としようとかするものではありません。あるものをあるがままに、それに捉われて、喜んだり悲しんだりする心の方を平静に整えさせようとするのです。あたかも明鏡は真相をそのままに写して、ゆがめたり不平をのべたりしない如くです。今直接の関係はありませんが、西方浄土は、明鏡の如く十方世界の真相をそのまま写し出します。

また、渴愛の実体は自我心ですが、この自我心は、老病死を苦とし不満とする心の現われです。釈尊は生老病死のような何人にも否定されない事実こそ、何人も認めねばならぬ道理を現わしているものとされました。生老病死の事実から諸行無常——すべてのものは止まることなく変化する——という道理を見出され、この点に関しては、無常の

道理を道理として、道理に随順するに至るのが悟りの道であるとされました。ちょうどこの逆に向うのが自我心です。そこで悟りの道で自我心がなくなるのですが、自我心のなくなることを無我といいます。無我は道理を否定する自我心の否定に外なりません。これも小乗派の人々は、人間的生存のなくなることだと考えました。小さい自我心を否定して、大きく開いて、社会もしくは世界を我れと見るような、道理への開放をば、個人的實在の死に誤解したのです。

小乗派の考えは、我が人生の滅から、人生そのものの滅を宗教的至樂として求めるに至って、ついに動きのとれない人生否定論に陥入ったのです。

ここで話を転じて四弘誓願にうつります。

衆生は無辺なれど、誓って願くは度せんとす。

煩惱は無尽なれど、誓って願くは断ぜんとす。

法門は無量なれど、誓って願くは学ばんとす。

仏道は無上なれど、誓って願くは証せんとす。

これは四弘誓願であって、すでに御承知の方が多いと思います。またよく聞く言葉に、菩薩心があります。これは「悟る心」のことで、自分も悟り、社会を悟りに導く努力であります。この菩薩心をおこすことが、四弘誓願であり

ます。この四つの願いのうちで、根本は第一の願いです。衆生は無辺ということは、数限りない大衆ということです。そして大衆の全部を迷いの此岸から悟りの彼岸へ度したいというのが「誓って願くは度せんとす」であります。大衆が無限である以上、誓願の努力と活動も無限に続けなければなりません。すなわち無限に一切大衆に奉仕せんという願いとなります。

第一の願いのため、自身の迷いや怯弱な精神も一掃せねばならぬのが第二、第三、第四の願いです。

この四弘誓願は、一切の諸仏諸菩薩に共通な願です。から、総願と呼ばれます。総願に対して別願がありますが、実は総願も別願も同じことなのです。ただ別願は、仏や菩薩によって違う特種な願で、例えばアミダ仏の四十八願、薬師仏の十二願といったものです。しかしそのすべてが、四弘誓願の精神に立っていないものではありません。従って四弘誓願が仏菩薩の実状に即して具体的に實際化されたのが別願であります。

さて四十八願は、アミダ仏の前身である法蔵菩薩の別願であります。この四十八願が成就して、法蔵菩薩はアミダ仏となり給うのであるし、その仏界である西方浄土がなり立ったのです。故に四十八願は西方浄土の設計図でありま

す。また四十八願がアミダ仏の実態を明かにし、浄土の構造を最も正確に知らせるものといえます。

四十八願は、大きく分ければ、アミダ仏の仏身に関するもの、浄土の国土に関するもの、衆生の救済に関するものの三類となります。

しかし全体を通観して、一番目につくのは聞名の功德です。浄土は前述したように、快樂を得る所でなく「大衆と共に仏道を成じたい」と希う菩薩たちに、その菩薩行を完遂せしめるところです。浄土に来たものに対して、菩薩行を完遂する自信と勇氣とを与えて、十方の世界へ勇躍せしめる拠点となるものですが、浄土の外にある凡天や菩薩が、ただアミダ仏の名を聞いただけでも、それらの人々を仏道へと向わせ、菩薩行の能力を増進せしめようとするのです。

浄土に願生するのも聞名するからですが、聞名しても願生しないものは、いわば無縁の衆生というべきところを、アミダ仏からは聞名有縁の者とされて功德を賜わることとなるのです。すなわち仏の大慈心は、仏から有縁を求められるのであります。私共はかつて空也上人や一遍上人がちまたに念仏し、念仏を踊り、名号の札を与えたことを想起すべきです。たとえ浄土を願わないものにもアミダ仏の聞

名の功德を及ぼす働きであったことに思いを致さねばなりません。念仏するのも、読経するのも自身のみの功德ではありません。知らずして聞名の縁を作るものというべきで、その意味では売僧の誦經にも聞くものに聞名の功德はあることを考えられます。

しかし、アミダ仏の功德をほんとうに受けるのは西方浄土においてであります。聞名の功德も最後の目的は浄土で菩薩行せしめることです。浄土のセンターにしようとするものです。

四十八願のうちで特に有名なものは次の三願です。

第十八願——十方の衆生で（アミダ仏を）至心に信樂して、浄土に生ぜんと欲し（アミダ仏を）たとえ十念しただけのものでも、浄土に生ぜしめる。但し（父母師僧を殺害し、僧団を破かいする）五逆罪のものと、正法を誹謗するものを除く——念仏往生の願。

第十九願——十方の衆生で菩提心を起し、諸の功德を修し、至心に発願して浄土を生ぜんと欲するものには、寿終の時に仏は大衆に囲遶せられて其人の前に現ずる——来迎引接の願。

第二十願——十方の衆生が我が（アミダ仏の）名を聞き、念を浄土に係け、諸の徳本を植え、至心に廻向して浄土に

生ぜんと欲するものには目的を達せしめる——念仏定生の願。

日本のどこへ行っても、仏教のある所には必ずといってよい程に「南無アミダ仏」と唱える念仏の声をきくことができます。また多くの寺院はアミダ仏を本尊としてまつています。さらに道を行って一步都会を出れば名号石、すなわち石柱に南無アミダ仏と刻んだのが見られます。これらは第十八願の念仏往生の願による念仏信仰の現れであります。また、日本の古美術で重要な地位を占めるものにアミダ仏来迎の図や彫刻があります。西山の彼方からアミダ仏が半身を現わされている山越の来迎仏や、二十五菩薩を従えられたアミダ仏が紫雲に乗って降りておいでになる図や、或いは京都知恩院にある早来迎の図の如きはアミダ仏が諸菩薩を従えて疾風に乗ってはせつけられる相がえがかれております。古いお寺には大ていある絵図ですが、これは死者の枕頭にかけるもので、アミダ仏が念仏信者の死を西方浄土から出迎えられる図であります。このような信仰は、第十九の、来迎引接の願に基づいているのです。

さらにまた、お寺に香ろやその他を寄附して、表面に南無アミダ仏と刻んだものがあり、或いは堂塔の修理や寄進をして、表石を立ててその由来を記して南無アミダ仏と刻

してあるものもありますが、これは第二十願によって、諸々の徳本を植えて、それを至心に廻向して西方浄土に往生しようとする願うものと考えられます。

このように、三願は一般人が西方浄土へ入るためのものです。そしてこの三願は、信者の自由な選択によって、三者の中のいずれか一つを選び取って、たとえば念仏するものは第十八願で、或いは菩提心を生じて来迎を願うものは第十九願で、或いはまた種々の善行をなしてそれで浄土に往生したいものは第二十願で往生するものと見るべきのよう思う方もありましょうが、実はそうでなく、念仏往生を願う第十八願相当の人でも、その念仏が正しくあるならば当然に発菩提心の心がけでなされるものであるから第十九願の来迎もあるべきであり、そのような人はまた第二十願の徳本を植えることをできる限り心がけるべきであります。つまり第十八願は西方浄土で生ずる正因を念仏として明かに示す願であり、第十九願は、念仏を正因として浄土を願うものでも、諸行を修するものでも、その人の臨終にアミダ仏が来迎引接するとせられる願であり、また第二十願は、アミダ仏の名を聞いて浄土に往生したいという係念はするが、その善が劣弱で直ちに往生はできないが、しかし宿善を重ねて至心に廻向すれば必ず目的をとげる時が

くるとする願であります。四十八願の中で三願が別立して立願された動機からいえば、三願各別に独立したものであり、各々に独立の意義を認めることができますが、四十八願が成立して、これを楽しむ立場からいえば、三願すべてにかなうことが望まれるものである筈です。

このようにして、三願とくに第十八願は信仰の中心ともいふべき重要なものですから、更に詳しく述べましょう。

第十八願——設し我れ仏を得たらむに、十方の衆生、至心に信樂して、我が国に生ぜずば、正覺を取らじ、ただ五逆と正法を誹謗するをを除く。

五逆罪とは、父母を殺し、仏教の聖者を殺し、仏教の教団を破かいし、さらに仏身をきずつけて血を出す罪です。し、正法を誹謗するとは、仏教を誹難してそしめることです。両者共に、仏教の重罪とされています。これらの重罪を現に企てているものや、現に実行しているものは、もし往生を願っても浄土に往生せしめないというのです。ただし罪を犯した者でも、改悔した者はもちろん往生をゆるすのです。従って願文の但し書きは、念仏者をして罪を犯させないための警告であるわけです。このことを抑止門と呼んでいます。さて「至心に信樂して我が国に生ぜむと欲し」とは、西方浄土へ生ずるものの心がけを記したものです

が、教義の上から安心といわれるものです。「至心」とは至誠心のことです。一向に真実で、身の内外にうそのないことです。「信樂して」とは深心のことです。アミダ仏の救済の力が有力で、自分の方は極めて無力で、仏の力による外はないのであることを深く信じて、アミダ仏を念ずるところです。「我が国に生ぜむと欲して」とは廻向発願心のことです。西方浄土に生じたいと願う心です。しかし浄土に生ずることは、浄土に往ったままという意味ばかりでなく、衆生救済の力を体得して人間界にかへって苦の衆生を救済しようという心持であることが大切です。

「浄土」購読規定

一部定価 金四十円

(送料四円)

会費 金 四八〇円

(送料不要)

浄土 三月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年二月廿五日

印刷 昭和三十三年三月一日 発行

〔定価四十円〕

編集人 竹中 信常

発行人 佐藤 密雄

印刷人 大橋 貞雄

印刷所 共同印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

最新刊

童話学入門

B 6 360頁 価480円 丁50円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山憲尚 著

- ◎ 童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- ◎ 内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部

取次所 日本童話協会

花 祭 用 品

お盆用品卸領布

各宗尊像御影御守謹製

仏 教 図 書

カレンダー等発行

東京都千代田区代官町二番地

三 宝 閣

電話 丸ノ内(23)二〇六六番
振替 東京 五四七九九番

取次領布所 両羽会館

東京都文京区表町五四番地
電話 小石川(92)三六五〇番

若い世代の人々のために!!

大正大学教授
竹中信常著

宗教心理の研究

A 五判五九〇頁
定価一二〇〇円 千実費

宗教が現代人の心理にどのように受けとられているかという
ことを、古来の学説史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗感心等とテーマとしてとり上げている。宗教を
理解し、信仰を他に伝へんとする者にとって必読の書である。

発行所

青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川区上大崎一丁目七八二

取扱

法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

解説増谷文雄 画井上与志夫

詩島田きんや

保育ののさま

B5判 七色刷 美本
定価 八〇円 千一六円
(十部以上七〇円千実費)

この本は、宗祖 法然上人のご生涯とご教旨を、少年少女に
わかりやすく、親しみやすい形で描きだしたものです。内容
は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

指導 外語教授 増谷文雄 画 中村ひろし
監修 東大正大講師

法然さま

B5判 一〇四頁
定価一三〇円 千二四円
(十部以上一〇〇円千実費)

うつくしい絵と、やさしい童謡とで、仏の世界のイメージを
おさな心の中に、植えつけるようにつとめ、お母さま方
のために、それぞれの絵に解説をつけました。

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ 2人乗	Y 13.000
鎖ブランコ 3人乗	Y 15.000
鎖ブランコ 4人乗	Y 22.000
鎖ブランコ 6人乗	Y 26.000
椅子ブランコ 4人掛	Y 13.500
太鼓橋	Y 10.000
ジャングルジム 中型	Y 28.000
単式滑台 中型	Y 23.000
複式滑台 中型	Y 36.500
動物付き遊動木	Y 30.000

此他各種、一報カタログ送

配達実費(都内横浜 500 円以内
其他1000円以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費当社・送料着払)

組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町718
電(75)1024(池上駅東3分)

幼稚園 運動遊具

全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価にのモ
ットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
筈・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。